

曹 禺 著

戯 曲 『北 京 人』 (Ⅳ)

吉 村 尚 子 訳

第 3 幕

第 一 場

北平^{ペイピン (139)}では、旧暦九月の朝夕は、人々はもうネルの冬着を重ねなければならなかった。晩秋の空は異常に肅然とした静けさ爽やかさである。黄昏ちかく、もの古りた庭園には臥龍さながらの榆の老大木の梢たかく、おびただしい鴉の大群が、一面に黒点を撒き散らしたかのように、飛び去り飛び来り、さわがしく鳴き交^{かわ}してやむ気配もない。やがて暮色が一段と深まると、鴉もおのがじし巢に帰り、蒼茫の夕靄の中、まだ帰當せぬラッパ手の城壁上に吹きならすラッパの音がひびいて来る。遙かに遠いその孤独⁽¹⁴⁰⁾な角笛の音は、人々の心の底に言い知れぬ佗びしい思いをはりつかせて、まるで多情多恨の亡霊⁽¹⁴¹⁾が、呼び返す術^{すべ}もない雲煙渺茫の己^{おの}が過ぎし昔を、哀惜と憂愁にみちてひとり追憶するかのよう、悔恨と後髪ひかれる思いに悩みつつ、うそ寒い空気^おのうちに、小やみもなくおののきふるえている。

(139) 前掲。日華事変前の一時期、再び北京から北平に戻ったことがあった。劇の「時」はこの時期であることを知らせる為に、故意にこの北平の称を用いている。

(140) 当時の、このラッパは水牛の角製の笛で日本でひと昔よく使われたチャルメラのような一種の哀感をもつ音であった。作者は鳩の名として曾文清に孤独という自分の心境を表わす語を用いさせている。同じ語をここでも用いていることに注意すべきである。

(141) 解放直前まで、中国の一般庶民には、人間には「魂」^{たましい}が宿っていて、肉体が死んだ瞬間、その魂は肉体を離れると信じられ、愛児が死んだ直後の夜など、母親がその魂を呼び返すべく横町や小路を、愛児の名を大声で泣きながら呼び歩く姿が実際に見られたほどである。

日あしは漸く短かく、六時前というに、石の^{パイロウ}牌樓の彼方の夕陽は西方、茜色の山霧のなかに沈みゆく。夜半^{よわ}ともなると颯々の西風は吹き起り、庭前の半ばすがれた樹木を、ざわざわ、揺れ騒がせる。翌早朝、陽光は再び家の峰のつややかな瑠璃の瓦を照射し、天気清朗、大気はすがすがしく、地面は^{ひとつら}一面の白霜におおわれ、庭の内も街の舗道もおしなべて前夜西風に吹き散らされた黄葉で^し舗きつめられる。気候は確実に寒さを増し、早朝外出する人々の息は、冷い空気のなかで乳白色に凝固する。朝市から買って来た蔬菜は、あたら、その表面に薄氷をはり、室内に長く掛けている足先きは、かなり凍える。窓紙にへばりついた^{おの}蠅は己が身体を重そうに、いっとき、飛び立ちはするものの、すぐ力つきて窓の木枠上に落ちる。往時、このような気候ともなれば、曾家あたり、比較的富貴の邸宅では、屋内にははやばやと^{カン(142)}坑の火を入れ、室内はぬくぬくと暖かだった。大客間の精巧な^{ゴージャス(143)}隔扇と大きな硝子窓の辺りには数多くの咲き盛る菊花の、緑や白や黄色の、広花卉のもの、いとづくりのものなど、あらゆる菊の名花が陳列され、或るものは花台に或いは床に、また或る一鉢――、^{ゴージャス}藍紗をはった^{ゴージャス}隔扇の前、紫壇の花台の紫色の懸崖づくりの鉢などは、懸崖の名を辱かしめず見事に垂れて、絢爛目を奪うばかりであった。主人は気嫌のよい折には、花の前で菊を^め賞でつつ酒を汲み、親しい知人縁者を招いては、^{ヤンロウホウオ}ふつつと煮える羊肉火

- (142) 朝鮮半島の建築のオンドルと殆ど同じ。室内の一角をダブルベット位の広さに土で床を作り、その下に普通は高粱がらを焚き、その煙を這わせ、床及び室内全体を居心地よく暖かくしたその泥の床のことを^{カン}炕という。煙道が曲りくねって這わせてあるので、燃料が非常に経済的である。
- (143) 前掲。二室を一室のように使いたい時のための設備。普通、必ず偶数の扉数で二枚づつがそれぞれ観音開きとなる。畳数で十二帖と二十帖位の広さの室間の^{ゴージャス}隔扇であれば六枚位の扉がつけられ、普通は下半分が木材、すなわち、上物は紅木・黒檀・紫檀などで精緻な彫刻などが施され、上部は白などの絹地に極彩の花鳥などが描かれたりしていた。

ゴウオ(144)

鍋をつつきあいながら、拳をうち、詩をつくり、さしつさされつ熱気は耳朶に、こころよくまわる酒の酔いに、当るべくもない気焰をあげては無限の享樂たのみにひたるのであった。往時のかの歓樂と気概は、今この部屋のなかに一片の跡もなく、慘澹たる光景そのかみは往年の盛大さにとって代っている。現在のこの晩秋の黄昏どき——第二幕を去る一ヶ月余りである——一層の零落衰退の様子は著しくあらわである。隔扇ゴーシヤスの藍紗は色あせ、一二枚の隔て扉の藍紗はすでに破れ去って、普通なみの窓用の高麗紙で貼られている。が、それさえ黄ばんでしまっている。隔扇前ゴーシヤスの床ゆかには白菊の一鉢がおかれているが、葉は黄ばみ、花もまたすがれ、首を垂れてしまっている。壁ぎわの古い紅木の半円の卓上には濃藍の大花瓶が置かれ、それにもまた三四本のすがれかかった黄菊がささされている。花卉は卓上に散りこぼれ、この首うなだれた菊花こそ、このおちぶれた旧家にふさわしくもある。置き並べられた数々の小道具類はみな古ぼけて、壁面にただ一枚かけられた誰の筆とも知れぬ山水画は、表装リンズの綸子りんすがはや灰色に色あせ、下部の軸木も片方が毀れおち、一方だけが残っている。壁紙もはがれはじめており、壁のすみに立てかけられた七絃琴の袋おおいつかは何に用ったのか持ち去られ、橙色の綵ふさだけが依然として重々しく垂れ下っている。その色さえさだかならず褪せてしまった上に、蜘蛛が巣を張り、其処からまた斜に蜘蛛の糸は室の天井へとはり渡されている。書齋の窓紙は少し破れ、切りはりをしてあるが、その

- (144) 日本でも相当普及している。下部に炭火を起し、煙突があるので火勢が強い。いわばその煙突の周囲がドーナツ型の鍋である、スープの多いことを根幹とする一種の「寄せなべ」用の焗鍋。その寄せなべの材料に羊肉を主材としたものが羊肉火鍋である。北京往時の、この種の鍋では七味的な調味料に数奇が凝らされ、三・四十種類も並べて出され、客は好みにより各自の小井にその幾種類かを調合して、煮えたぎる鍋からとったものを、そのあわせ調味料につけて味わう。日本で行われているこの種の中国料理は、涮羊肉じんぎすかんなべにしてもすべて肝心のこの調味料が料理屋などのお仕着せで、臥龍点睛を欠くものというべきである。

上がまた破れている。角型の^{トン}凳が二脚、壁寄りの適宜なところに置かれていたが、一脚はそのまま、一脚には針仕事の^{バスケット}筐がのせてある。八角窓のガラスも、長らく拭いてないらしく、ほこりにまみれている。窓前の^{角テーブル}八仙卓子には急須と茶碗が二個置かれ、その傍にソファがひとつ。

淡い夕陽が窓ガラスをとおして、卓上の菊の^{はなびら}花葩と蜘蛛の巣まみれの七絃琴の^{ふさ}総を弱々しく照し、ほの暗いがふと又、夕陽の照り返しのように明るくなり、再び暗くなりまさってゆく。戸外にひとしきり鴉の鳴きさわぐ声响起り、一輪車の水売り車が、今また単調にギイーッギイーッ と音をたてて通りすぎてゆく。太陽は西山に没して、室内、漸くくらしゆく。

幕があくと^{こじょうと ウエヌツアイ}姑奶奶の文彩がソファに腰掛け、毛糸の⁽¹⁴⁵⁾チョッキを編んでいる。古い黒の舶来の絹羅紗の⁽¹⁴⁶⁾袍子を着、黒羅紗⁽¹⁴⁷⁾鞋をはいている。もの案じ顔で何時ともなく手を休めてしまつては、黙然と何事かを待っているようでもある。彼女から遠く離れた古いソファにだらしなくもたれ掛けした江泰が『麻衣神相』を夢中になって読みふけている。左手に破損箇所を赤い元結いでしばりつけた手鏡を持ち、本をめくっては自分の顔を鏡に映し、鏡を置いてはまた仔細にその和綴じの書物を読んでいる。

暫く間。

陳奶媽が、半分さしかけの鞋底をもち、書齋の扉をあけて入ってくる。髪には更に白髪がふえ、顔にも皺が多くなったようである。

(145) 前出。外側に着る長い着物。その衿のを夾^{ヂイヤバオ}袍、綿入れを棉^{ミイエヌバオ}袍という。

(146) 前出。当時の中国のいわゆる「鞋」は全部底まで布製であった。皮靴をはいているのは外国帰りか、よほどの西洋かぶれの金持だけであった。

(147) 民間で非常に信奉された相法（人相を見る）の書。本来は伝説をもととしたものであるが、中国庶民の間では靈驗あらたかなように信じられた。その相法を麻衣道と言ひ、またあらたかであることを印象づけようとして「麻衣神相」と名をつけたにすぎぬものである。

年をとって寒がりとなり、もう、灰色の木綿の薄棉襖わたいれを着、脚には黒い縞子の套褲タオクウ(148)を重ねてはいている。彼女のはいつて来るのを見、文彩はすぐ手の毛糸編物をおいて立ちあがる。

彩 (気がかりでならない様子で小声にたずねる) どんな様子なの?

陳 (その言葉をきいて立ちどまり、振り返って窓外へ耳をすます。文彩は心から気づかわしそうな眼で彼女を眺め、答えを待つ。陳はどうにもしようがないというように首を振り) 帰らないんですよ。連中、まだ帰ろうともしないんですよ。

彩 (落胆の嘆息ひとつ、再び腰を下して毛糸のチョッキを取り上げ、ゆっくりと編みはじめる。)

〔江泰、ちょっと振りむき、二人にちらりと眼をやり、いまいましてな思い入れをし、また例の『麻衣神相』を読みはじめる。〕

陳 (深く長い嘆息を洩らすとあたりを眺めまわし、袖口をひっぱり出して眼がしらをおさえ、四角の凳ベンチの前までゆき腰を下す、夕暮の淡い光をたよりに、黙然と鞋底をとじはじめる。)

江 (不意に両足をこすりあわせ、全身をぶるぶるふるわせる。)

彩 (顔をあげ、江泰を眺め) 足が冷えるんですか?

江 (うるさそうに) うん! (再び、占いの本をめくる) 彩もまたうなだれて毛糸を編む)

〔暫く間。〕

彩 (江泰を横眼に見て、また二針ほど編むが、どうしても我慢出来なくなり) 泰!

江 (聞えたらしいが、依然、本を読みつづける)

彩 (再び優しく) 泰! あなた何をよんでいらっしゃるの?

江 (相手にしない)

(148) 一口にいえば、ズボンの後腰だけが無いもの。以前、庶民の、多くは老人が厳寒期に脚の冷えるのを防ぐため、上部の太腿の辺りは前身だけ、膝の辺りから筒形になった綿入れを、普通の棉入のズボンなどの上に重ねてはいた。こうすればズボンだけの寒さを十分に防ぎ得る上、労働には非常に身軽であった。

〔陳 奶 媽は江泰を一瞥し、不満気に顔をそむける。〕

彩 (糸を置き) 泰! ^{あなた!} 今、何時ですか?

江 (鏡をとり上げ映して、振り返りもせず) わからん。

彩 (仕方なく、戸外の空模様を眺め) 六時になったでしょうかね。

江 (鏡を置き、振り返り、指さして冷淡に) 時計を見ろよ!

彩 時計、こわれちゃったのよ。

江 (白い眼で) こわれたら、なおしに持って行け! (再び鏡をとりあげる)

彩 (おずおずと) ^{あなた} 泰! あなた、も一度お客間へ行って、あの人達どうなったか、ちょっと見て来て頂けない?!

江 (うるさげに) 俺、知らん! 俺の手にはどうにも出来んよ。俺の手には余るんだ。君達曾家のことはややこしすぎて、俺には手のつけようがない。

彩 (懇切に) どうぞ、ねえ! もう一度、見て来て下さいませんか! あの杜さんとこのひと、いったい、どうしようっていうのかを。

江 (どうしよう? 連中、期限が来たから、金を返せ——というだけさ。金がなけりゃ君んちの、この家屋をよこせ。家屋がだめなら、曾老太爺のお棺——あの何十年も漆を塗ったあの楠の棺を、よこせ——なのさ!

彩 (力なく) でも、あの棺は、^{タイエ} 爹の生命よ。生命なのですから——。

江 この問題がそんな風にむつかしいんだ——ってこと、自分がちゃんと知ってるくせに、僕に行ってどうしろって言うんだい?!

陳 (先刻から針を止めて聴いていたが、口を挿んで) お止しなさいよ。大奶奶一人に相手をさせておおきなさいまし。どっちみちお金はないんだし、住むのには家があるんだし——

江 あの棺は——

彩 ^{おとうさん} 爹が手離せないし!

江 (文彩をにらむようにギョロリ) わかったろう! (また鏡を取りあげる)

彩 (うなだれて、嘆息し、ハンカチを取り出して涙を拭く)

〔間。戸外に鴉の騒ぐ声。水車の、ギーッギーッとして過ぎてゆく音。〕

陳 ⁽¹⁴⁹⁾ (鞋底をさしている。時々、針先きでごま塩の頭髪^{かみ}を二度ほどこすっては又、力を入れて鞋底に針を差しこんでいる。この時、針を止め、頭をもたげ、嘆息して) 帰りましょ！ 帰りましょ！ 明日は、わたしも帰りましょ！ お気の毒に、今日の老爺子^{だんなさま}のお誕生日は、何てまあ情無い日だったんでしょねえ！ あーあ、こんなで生きていらっしやるんだったら、いっそのことあの晩——。(不意に) これが昔の、祖老爺^{大御隠居さま}のお誕生日だったらねえ、邸内^{おやしき}にお客様をお招^よびになって、芝居⁽¹⁵⁰⁾はやらせるし、お庭にもお客間にも菊の花をいっばい飾^{かみ}って、お上からお下の者たちまで大盤振舞い^{しも}のお酒席^{さかもり}。どこもかしこもお祝い客だらけ、隅から隅まで、そこいら中が誕生祝⁽¹⁵⁰⁾いの桃⁽¹⁵⁰⁾やら饅頭⁽¹⁵⁰⁾やら、絹の赤幕⁽¹⁵⁰⁾でいっばいだったのに——。全然、今のようなこんな風じゃ——

(149) 前掲注146の中国の布鞋は、解放前、またほとんど全部が自家製であった。当時の家庭では一般の家庭女性はひまさえあれば、この奶媽のように、鞋底も「千枚とおし」で穴をあけ、その穴に針を差し込んで麻糸をかたくひいてさし、自分で作りあげる(納鞋底と称する)。その出来上った鞋底と身の両方を一緒に届けて専門家にくつの形になるようにくっつけさせた。このことを尚^{シヤン}鞋^{シイエ}といい、その店を尚鞋舗と称した。まもなく出て来る奶媽のことは「この鞋の身と底をとじつけて郵便で送ってあげて下さいね」はこの尚鞋のことをいう。

(150) 解放前、高位高官、財閥権力者などの誕生祝は日本では想像もつかない程、盛大に行われた。時には半年も前から実際の準備がはじめられ。時期が迫ると、邸内に棧敷^{しばい}を設え、有名な京劇の大一座を招び、めでたい出しもの、勇壮なもの、一座の十八番などが盛大に上演された。時によっては贈り物をもってゆけば見ず知らずの者でも贅をつくした大盤振舞い⁽¹⁵⁰⁾にありつくことが出来、飽きるまで飲み食い出来た。その贈り物の代表が寿桃⁽¹⁵⁰⁾という桃を象ったもの、寿麵⁽¹⁵⁰⁾と呼ばれる饅頭⁽¹⁵⁰⁾で共に長寿を祈るものである。また真紅に金や銀でめでたい文句を浮き出させた(後に生地として使用出来るよう金紙などで文字を剪りぬいたものをはりつけたものが多かった)思い思いの高価な絹地が贈られ、それは聯

彩 （ずうっと差し迫った難関について思いつめ、ぼんやり江泰を眺めたまま、陳奶媽の話もほとんど耳に入らぬ体だったが、この時ふと気をとりなおして穏やかに江泰に話しかける）泰！ あなた、何していらっしゃるの？

江 （白い眼で）俺が何をしてるか、見りゃわかるだろう。

彩 （強いてほほえんで）わたしね、あなたが鏡で何をみていらっしゃるかしたら、——って！

江 （とっくにうるさくて堪らなくなってる、という風に立ち上り）俺はな、俺の鼻を見てるんだ！ わかったかい！ 俺の鼻を見てるんだ。鼻！ 鼻！ 鼻だよ！ （鏡と本を持ち、更に遠い方の椅子へ行って掛ける）

彩 もうそんな大きな声をお出しにならないで！ ^{おとうさま} 爹，こんどは命びろいをなさったところなんだから。

江 （文彩が当てつけて言ったように聞きとり、癩にはさわるが、といっってどうしようもない忿懣の様子で、続けざまに彼女を指さし）お前と来たら！ お前って奴は！ お前という奴は！ 口さえ開けば、俺があおやしの晩、父親を怒らせて病気にしちゃったって、口吻くちぶりなんだ。誰にだあによめってきいて見ろ！ 知らない者は居ないんだぞ！ お前のおの御令兄やおあによめ 嫂 さまが——

彩 （極力弁解する以外に手のほどこしようがなく）そんな風に思っってなんかいるものですか！（うつむいて、おとなしく）わたしはね、お父様が今日やっおもやと病院からお帰りにおもやなったばかりだから、お父さまにお祝いを申し上げるといおもやうことで、上房にちょっとおみまいに

などとして壁にかけられ、数が多いと幔幕のようになる。その他祝われる者が要路の権力者であればある程、自己の出世につながる賄路の意味をもつものでも公然と贈られる得難い機会の一つとして、金・銀・宝物・物資など考えられないほど高額・多量のものが、お祝いの品として、ぞくぞくと運びこまれ、この文章そっくりに、豪華絢爛、目を奪う光景であった。心ある者は政治腐敗の大きな癌の一つとして、秘かに眉をひそめていた風習でもあった。

行っていただけたら——っておねがいしてますのよ。どう？

江 (それでもプリプリしながら) 俺にはわからん。彼は僕にあうのを嫌がってるんだぞ。だのに、お前は どうして僕があわなければいかん、——って言うんだ。あの日僕は酔っ払っちゃって、済まないことをしたということになっちゃったがね、先月病院まで一度見舞に行^{おやじ ぜんぜん}ってさえ、彼は全然、俺にあおうともしないんだ——

彩 (言いわけ的に) ええ、それは、^{おとうさま}あの方が今のところ、御気分がよくない——からなんですわ！

江 じゃ俺は、気分がいいって言うのかい？

彩 (困って) でも——今、もうお父様は帰っていらしたんですもの、まさか一生涯おあいにならないってことは出来ないでしょ。お客としてでも好いでしょ。御主人様が帰って来たんだから、わたしたちだってちょっと声をかけといた方がいいでしょ。ましてあなた——

江 (筋が通らぬとなると、ますますいきりたつというわけで、彼女の前まで歩いてゆき、指でつく様なかたちで) お前、お前ッ、お前の口は、この頃どうしてこんなに達者になったんだい。こうも達者にねッ！ お俺は逃げだすよ！

〔江泰、むっとして鏡を持ち、書斎の小門から退場。〕

彩 (こまって) ^{ヂヤンタイ}江泰！

陳 ねェ！ 勝手にさせておおきなさいましよ——

〔江泰、あわてて戻り、もと居た辺りを探しまわる。〕

江 僕の『^{マア イ シエヌシイアン}麻衣神相』は？ あ、此処だ！

〔江、再び出てゆく。〕

彩 ^{あなたア}江泰！

陳 (心から同情し) ねェ！ 気ままにおさせなさいましよ。むりにあわせないだっていいでしょう。^{あの方}姑老爺を御覧になれば、^{ごいんきよさま}老爺子はまた^{チンわかさま}清少翁を思い出されて、よけい気分が悪くなられるかも知れませんよ。

彩 (仕方なく、嘆息するばかり) あんた、鞋底はもう仕上げちゃった

んでしょ。

陳 (微笑して) もう一針かふた針ですよ。(鞋底を手放し、銅ぶちの老眼鏡をはずして、眼がしらを拭き) 鞋は出来たけど、差し上げる人の方がまたいなくなつて!

彩 (強いて希望的なことばをさがし出して) 人間、いつかはまた、帰って来るものだわ。

陳 (一瞬ぐっとこみあげてしまい、両手で上衣の裾をひき出し、涙をぬぐい悲し気に) はい。そうなってくれるといいのですがね。——
彩 ナイマア 奶媽! あした帰っちゃ駄目よ。もう少ししたら、お兄さま、きつと帰って来るから!

陳 ^{ひとつき}(一月たらずの心労で、来た時の血色の好さは失われ、頭をびくびく震わせ、生気のない口許をしぼませしぼませする。実のところそれは辛くて堪らないのに、強いて言いはって) だめ、だめ! わたし帰ります。帰るんですよ! (立ち上り、その辺の裁縫用具をはり
彩 ^{ばこ}筐の中に入れ、赤くなっている鼻の頭をこすり) 待つと言え、^{ひとつき}一月あまりも待ちやうたんですよ。^{がん}願もかけたし、お香も焚きましたよ。でもやっぱり、^{たより}消息はないんです。気の毒そうに、^{おぼつちや}我的清少爺は薄い^ま給の^{パオ}袍を一枚着たっきりで飛び出して行っちゃったんだから——(戸外へ向い大声で) ^{シイアオチユール}小柱儿! ^{シイアオチユール}小柱儿!!

彩 ^{シイアオチユール}小柱儿なら、多分、袁先生の荷造りを手伝ってるんでしょ。

陳 (^{ばこ}裁縫筐の中から小型の風呂敷を取り出し、まだ完全になっていない^{ミエヌシイエ}棉鞋を包みながら) もし、——もしも、帰っていらっしゃったら、直ぐわたしにお沙汰をくださいませよ。わたしが田舎からあいにとんで来られるようにね。(また、思わず涙があふれ出る) 居、居所がわかりましたらね、^{おしやうとを}姑小姐! すぐにこの鞋の身と底をくっつけて、郵便で送ってあげて下さいまし。(また振り返って大声で)
彩 ^{シイアオチユール}小柱儿、(文彩にむかい) そして、^{このはあや}大奶媽が作ってさしあげたんですよ、——って言って、^{ナイマア}奶媽におたよりを下さるように仰言っ下さいね。(ちょっと笑顔になり) その時には、わたしは生きてさえい

たら、どんなに遠くたって、会いに参りますからね。(堪らなくなり、また噎び泣き出してしまふ)

彩 (歩み寄り、老奶媽うばをなぐさめ) そ、そんなに悲観しないでね！
お兄様、他所よそにいらしたって、別にどうってことはないんだから。
(強いて苦笑し) 三十六七にもなって、もうじき孫まで抱こうって人が、どうしてそんな――

陳 (涙、ほとほと落ちる) 幾つになつたって、わたしからみれば子供なんですよ。今まで家うちを出たことはなし、食事だって着換えだって、自身じゃ出来ないお人が――(呼びながら、大客間の戸口の方に歩みより) 小柱シイアオチユール儿！ 小柱シイアオチユール儿！

小柱儿おばあの声 はあーい。奶媽！

陳 お前、何をしているんだい？ まだ片づけて寝ていないんだね。明日ちゃんと道が歩けるようにな。

小柱儿スウシイギョチイェの声 慄えさ小姐が鳩に餌をやるのを、手伝ってるんだもの。

陳 (大客間の方へ歩き出し) あーあ、慄小姐スウじようさまもひとりぼっちでお可愛相にね。でも、食べ物を無駄にするだけです。こんなときに、何だって鳩なんかに、一生懸命に餌づけするんでしょうね？!

〔陳、大客間の門から退出。〕

彩 (半ばは陳奶媽に、半ばは独り言で嘆息まじりに) 餌をやるのも、鳩を可愛がってた人のためなんだわ！

〔戸外に、またひとしきり鴉のさわぎ。彼女は身震いし、編物をもって立とうとする。と、――

〔江泰が、悄然、書齋の小戸口からはいって来る。〕

江 (先刻の気焰はどこへやら、五月雨にびっしょりぬれそぼちた如く、しょげきっているようにも、また、憤慨してるようにも、悲観している様にもみえる顔つきで、たてつづけに首をふりふり) ぜひもなや、ぜひもなや――だ！ 誠にもって、ぜひもなや――だ！ こんな大きなお邸だつてのに、何処へ行ってみても、ひと所だつて暖い所がないんだ。今日になつても、まだ火をいれないなんて、足が凍えち

まって、堪ったもんじゃないよ！ お前のあの^{かあねえさま} 令 嫂 ときたら、金をいじくることしかわからないんだし、^{おやじさま} 父 親 はお棺のことしか考えていない。俺にはとんと腑におちないんだ。こんなにして生きていて、いったい何の意義があるんだね。どういう意味があるのかねェ。

彩 愚痴るのはおよしになって！ どんなに苦しい日暮しだって、やっぱり暮していかなくちゃならないんですもの！

江 不愉快極まるッ！ 俺も革命をやっちゃうぞォ！（冗談のようにもまた、不平をぶちまけるようにもとれる口調から、次第に本気に怒って怒鳴りだし）俺だって反抗してやるぞ！ 俺だって打倒してやらあ！ 俺だって瑞^{ルイヂエス} 貞のつき合ってる革命党の友だちみたいに、反抗してやる。打倒してやるッ。何もかもでんぐりがえし野郎だァ！ 革命のべらんめえ！ どいつもこいつも、ひっくりかえしてやるッ！ そして、そしてェ——（突然自身のポケットを探り、われ知らず自身を皮肉り嘲笑し、みじめに笑って）俺のこのポケットには、たった一円しか残っちゃいないんだ——（なおも、探りつづけ、軽蔑的な眼で）いや、一円だって、ありゃしない——（うわ眼づかいにちょっと考え、小声で）人相を見て貰ったんだァ！

彩 ^{あなた} 江泰！ それは——

江 （突然、首をふり、「親の喪中」といった様子になり、深い嘆息をひとつ）もしも僕に、「万金油」みたいな薬が発明出来たら、どんなにいいだろうなあ！ どんなにいいことだろうなあ!!

彩 （切なげに）^{あなた} 泰！ もうそんなあれこれ、出まかせのくだらないこと、おっしゃらないで！ そんな風だと、あなた、ノイローゼになっちゃいますわ。

江 （彼女のことがばが耳に入らぬらしく、急にまた元気になり）^{ウエスツアイ} 文 彩！ ほんとはね、僕は今朝市場へ散歩にいて、又、人相を見て貰ったんだ。その易者も僕はちょうど今、鼻の運に巡り合っているところで、金が出来るというんだ。僕の鼻の形が生れつきふっくらしてて

金持相だとしきりにほめ上げるんだ。(大まじめに)僕はたった今、自分の鼻を映して見たんだがね、生れつきは相当なもんなんだなァ！(文彩にけなされると思って)易者にだって、少しは理窟があるものでね。でなくちゃ、俺の以前のことをああびったり言い当てる筈がないじゃないか。

彩 じゃあなた、お友達をたずねて行ってみたらいいでしょ！

江 (些か自信あり気に)うん、俺、絶対訪問するよ。例の金持の同窓生たちを訪問しよう。(自身の言葉で、自分が行動する勇気を呼び起させようとしでもするように)僕、すぐ行ってみよう。もう少ししたら、すぐ行こう。多分、好運に突き当れるだろうからな。

彩 (はげますように)江泰！^{あなた} 脚^{あし}まめに動きさえしたら、出世出来ないはずはないんですよ。

江 (思わず気嫌がよくなって来て)ほんとかい?!(突然)^{ウエヌツアイ}文彩！僕、さっき正房へお父さんにあいに行ったんだ。

彩 (同じように喜んで)で、お、お父さま、何て仰言ったの？

江 (ずるく)ところが、——俺のせいじゃないがね——^{おやじ}彼、部屋にいなかったんだ。

彩 お父さま、またお部屋から、お出ましになったの？

江^{うん} 嗯。どこへ行ったのかは、わからんがねえ——

〔陳奶媽が書齋の小門から登場。〕

陳 (些か慌て気味に)^{おじようさま} 姑小姐！ 見にいらして下さいませよ。

彩 どうしたの？

陳 ねえ！^{だんなさま} 老爺子といたら、またお一人で杖をついて、^{ジイアンコファン} 廂房へ^{おめでた} 寿木をみに出かけられたんですよ。

彩 まあ——

陳 (いたましそうに)^{だんなさま} 老爺子、お一人でね、あそこにお立ちになって、じいっとあのお棺にむかって、涙を流していらっしゃるんです——

江^{スゝさん} 慥小姐は？

陳 お台所で奥様に、何かお汁物を作ってあげていらっしゃるようです

よ。——^{おじようさま}姑小姐！^{トウさんとこ}あのお棺はもう金輪際、杜家には渡せませんよ。あなた先にいらして^{だんなさま}老爺子にそう勧めて下さいまし。

彩 （ほとほとと涙を流し）お可愛そうに！ お父さま！ わたし行くわ——（書齋へと歩く）

江 （まぜっかえすように）やめた方がいいね。^{ウエヌツアイ}文彩，お前先にお前の御立派な^{ねえ}嫂さんに勧めに行けよ。

彩 （^{まつしようじき}真正直に）あの方，^{おねえさん}丁度今，^{トウさんとこ}杜家の人^{トウの}にことわっているところなんですよ。

江 ^{フン}哼！^{ねえ}嫂さんは^{トウの}丁度今，杜家の者にわたす相談をしてるところだよ。

お前，あいつにも少し良心をもたせろよ。杜家に担保にしてある^{うち}家は残しておいて，後になってひとりで好い値で売って，^{おやじさん}君の父親のお棺はわたさないようにするなんて言わせないようにしろよ。おぼえておくんだね。お前のおやじさんが，今日退院した病院の費用だって，全部，^{スウさん}懐小姐が出した金なんだぞ！ お前の^{ねえさん}嫂子ひとり部屋のなかにかくれて，^{とり}鶏肉なんか食っていながら，^{ひと}他人前では貧乏なふりをしてるんだ。口先だけでごまかしがってッ！ お前は^{おやじさん}爹^{あいつ}があの日，病院に入る前に，^{おやじさん}あの方が爹^{おやじさん}に噛みついたことを忘れたのかい？！

^{フン}哼！^{まつたく立派な嫂さんだよ}お宅の嫂さんときたら——

〔思懿，書齋の小門から登場。〕

陳 （足音をききつけ，振り返り，^{大おくさま}思わず声を低め）大奶奶が来ましたよ。

江 （黙りこみ，^{はし}傍へすり寄る）

〔思懿は暗い顔つきで，眉をよせ，ことさらに，困惑しきった悲痛な様子をあらわそうとしている。コーヒー色の地に黒い花を散らした長袖のピロードの^{チイバオ}旗袍を着ているが，肘の辺りが稍すり切れている。襟首の⁽¹⁵¹⁾うち紐はかけず，黒ラシャの鞋。〕

(151) 解放後の現在ではほとんどなくなっているが，旗袍が中国の都会で普通に見られた頃は，ボタンの代りに，丸く打った組み紐でこぶをつくったものが，日本の昔の被布の前あわせの「うち紐」と同様に使われていた。

彩 (おずおずと) どうでしたの、^{おねえさま}大嫂!

思 (黙ってソファーの方へ行く。)

〔間。〕

陳 (訊かずにいられないが、恐ろしくもあり、で)^{トウさんとこ}杜家の人、結局承知したんでしょうか?

思 (依然として、黙ってソファーに腰を下す)

彩 ^{おねえさま}大嫂! ^{トウさんとこ}杜家の人たちは――

思 (ソファーの肘掛けに、ガバと面を伏せ、^{かお}大袈裟な^{しぐさ}所作で、慟哭しはじめる) ^{あなたア}文清! あなたは何処へ行っておしまいになったのよう? ^{あなた}文清ったら! この大世帯をほ^ぼっ放り出してェ! わたし一人に背負わせっ放しでェ! わたしに、どうして背負いきれますのォ! あなたがいて下さればァ、それでも相談が出来るのにィ、いらっしゃらないんだもの、こんな難問題、女のわたしにィ、どうしてよいかわかるもんですかァ!

〔江泰、傍に立って冷やかに思懿を見下す。〕

陳 (心を動かされて)^{大おくさま}大奶奶! あの^{トウさんとこ}人達、結局、延期してくれたんでしょうか?

思 (鼻水と涙を拭き拭き、鳴嚙しながら、かき口説くように) 考えてみて頂戴よう。あの紡績工場主の鬼みたいな^{トウさんとこ}杜家なのよ! 『倒れかけの塀は世間が押し倒す』って言う位だもの、うちがこんなになってるときに、どうして承知してくれるものですか。先方じゃ、うちに一人も男がいないのを知り抜いてるんだもの。(江泰、鼻先で^{フン} 啜! と一声) 年寄りには年寄りすぎて、若いのは幼なすぎる。彼奴等がこういう弱味につけこまない筈はないですよ。どうでも言うことをきけて、せまるんだもの――その手をゆるめてくれるものですか!

彩 (絶望して) そうするとあの人たち、やっぱりどうしても^{タイエ}爹のお棺をよこさなくっては――って?

思 (ずっと、ハンカチで、赤く腫れあがった眼を拭きながら、やはり

肩を震わせてすすり泣きしつつ) 外ほかにどうしろって仰言るの? お金, お金なんて, わたし達には出せないし, 家うちは住むのに要るんだし, この大勢の家族が食たべては行かなくちゃならないんだもの。あのお棺トウさんと こいんきよ ずうつとは杜家トウさんと こいんきよの老太爺ずうつとが何年間も欲しがってたもので, 今となっては絶対にほしい。絶対に——って。

江 (自身の寢室の入口のかま櫃にもたれ, 冷やかに) じゃ, すぐ連中に持ってゆかせりゃすむんだ。

陳 (とび上って) えッ! 連中にもってゆかせる——ですって?!

思 (江泰に構わず) それに, ——先方では今日すぐほしい! ——って——

彩 (息をのんだ体で) 今日?!

思 うん トウさんとこ いんきよ 嗯! 連中が言うのよ。杜家トウさんとこの老太爺いんきよが病気で, 今にも息を引き取りそうで, 遺言に, そのう——

江 ヌーイイ (彼女ヌーイイのことばをひき取って) 曾家うち じいさんの老太爺じいさんのお棺お棺がほしい——と言ったんでしょ!

彩 (間髪をいれず) そんなこと, おとうさま 爹おとうさまがどうして御承知なさるでしようか?!

陳 (口をはさみ) 御承知になるとしたところで, だんなさま 老太爺だんなさまに誰がいったいそんなことを, お伝え出来ますか?!

彩 (たたみかけて) まして おとうさま 爹おとうさまはさっき, 病院から帰って来られた許りなのよ。

陳 (たたみこむように) しかも今日は, だんなさま 老太爺だんなさまのお誕生日ですもの

思 (突然またわめきだし) わたし, わたしはそれを言いたいよう!
あなたア 文清! あなたったら, どこへ行っちゃまったのよう?! こんなになつてるときにわたしにどうしろっていうのよう?! しうとさん 公公しうとさんのことだつて考えてあげなくちゃならないし, 家うちの生活だつてみななくちゃならないし, わたしには, 今のところ, どつちもよくする 『忠孝両全』なんて出来るわけがないじゃないですか。 ウエヌチン 文清! わたしいつたい, どうすればい

いのよう！

〔大奶奶スーイイが泣きわめいているところへ、書斎の小門ツオンハオが開き、曾皓が杖をつき、よろよると歩み出る。紺色の「線春」(152)の綿袍ミエヌバオを着、上に黒羅紗の馬掛儿を羽織り、黒毛氈の鞋。顔色は黄色くひからび、見るも無惨に老いさらぼれている。が、歩き振りでは健康を恢復しているように見える。彼は極力、僅かに残る尊厳を保持しようと、絶望の中に最後の一あがきを試みようとしているのが、眼の色にうかがわれはするが。しかも一方で、彼はこの眼前にいる者たちを、嫌い抜いてもいるのである。〕

〔一同、振り返り、立ち上る。江泰は一見するや、こそこそと壁をつたわって、自室へ逃げこむ。〕

彩 おとうさま 爹ツオンハオ!! (馳けてゆき、彼を扶ける)

皓 (手を振り、押しとどめ、弱々しいかすれ声を精一杯ふりしぼり) 扶けはいらん。儂わし一人で歩かせておくれ。

(ソファーの方へ歩く)

思 (慇懃おとうさまに) 爹わし！ やっぱりわたしがお供申し上げて、お部屋へお帰りになって、おやすみ遊ばして下さいませ。

皓 (ソファーに掛け、一同にむかい) お掛け！ みんな、遠慮しなくても好い。

皓 (あたりを見廻し) 江泰ヂヤンさんは？

彩 あのひと、——(突然、思い出し) あのひとはお部屋にいますの。

(申し訳なさそうに) お待ちして、——おとうさま 爹わしにお詫び申し上げる、ってお待ちしてたんですが。

皓 大きいの 老大たよりからは、まだ消息がないかな？

思 (あわれっぽく) 済南おちの街なかで逢ったという人もおりますし、また、天津の小さな宿屋で見かけた——という人もあるんですけど、あの人は——

(152) 浙江省、坑県産の絹織物。

彩 心当りは何処もかも探したのですけれど、見当もつかなくなってるんです。

皓 そんなら、もう、探さんでいいだろう。

彩 (勇気をふり起し、老人を慰めるべく) 哥哥お兄さまも、今度は本当に後悔していらっしやいますわ。だから、今度こそは他所よそできっと何かお仕事をなさって、そして――

皓 (首をふり) 『知子莫若父』――だ。意気地がないのだから、遅かれ早かれ、彼あれはまたやっぱり――(これ以上もう、文清のことにはふれたく無いように突然、彩にむかい) お前、江泰ヂヤンさんを呼んで来なさい。

彩 (一足歩いて、心から申し訳けがなく、つい又、振りむいて父にむかい) 爹おとうさま！ わたしども、ほんとうにお会わせする顔もございませんの。ほんとうに――

皓 まあよい。それより呼んで来なさい。そんなことは、言うまでもない。(思懿にむかい) お前も、靈兒テイインアルと瑞貞レイヂエヌを呼んで来なさい。

〔文彩は寢室の前に行き、江泰を呼ぶ。思懿、書斎の小門から退場。〕

彩 江泰！ あなたッ！！

〔江泰、直ぐ、悄然と歩み出る。〕

江 (戸口を出るや否や、曾皓が自分を眺めているのを見、我知らず慚愧の思いにかられ) 爹おとうさん！ 爹おとうさんに―― 爹おとうさんに――

皓 (手を振り) まあ、お掛け！ (江泰、腰を下す。曾皓は奶媽にむかい、気がかりらしく) お前、慄小姐スツノアノに、今しがた病院から帰ったばかりなのに、何も台所でそんなに働かなくてよいから、一休みするひとやすように、言って来ておくれ！

〔陳奶媽、大客間への出口から退場。〕

彩 (ずっと江泰を見つめ、眼くばせをしていたが、陳奶媽が向うへむき直ると、小声で) あなた、早くお立ちになって、爹おとうさまにお詫びなさって！

江 (立つでもなし、立たぬでもなしの恰好で) 僕、僕は——

皓 (手を振り) 済んだことは、言わぬことにしよう。言わぬことにな!

[江泰、また腰を下す。沈黙の中に、思懿が暉儿と瑞貞を引き連れ、書齋の小門より登場。瑞貞は灰色地に紅い小花模様の木綿の夾袍ダイヤモンドを着、暉儿は、袍子の上に藍木綿の長い上着をつけている。]

皓 (ちょっと椅子を指す。瑞貞が文彩の後に立っている外はみな、順に腰を下す。曾皓は情なさそうに一わたり見まわし) 今この場に欠けているのは、多分もう老大長男坊主だけで、曾家の人間ものは皆集っているな。
(部屋を見廻して、軽く咳き払いをし) この家はお前達の太爺爺おおじいさまの敬徳公から伝えられたもので、我々は代代学問の家柄であり、親は子を慈しみ、子は親に孝を尽くし、他人から陰口ひとつきかれたことなどなかった。今となって、この家門から、儂のような不肖の子孫を出してしまい——

思 (幾分、いたたまれず)

おとうさま
爹! ——

[一同、肅然となり、互に顔を見合せ、またうなだれる。]

皓 曾家の家名に傷をつけ、その上、条理も弁えず、向上心もなく、孝行の道も知らず、家を守ってゆくことさえ出来かねるような子女を育ててしまったことは、——

江 (かなりうるさく感じはじめる)

彩 (頭をあげ、愧じいる様子で) おとうさま 爹! おとうさま 爹! あなた——

皓 これでは、儂が御先祖に対して、申し訳のないことなんで、儂としては、全く、先祖敬徳公に会わせる顔もないのだ!

(咳嗽。瑞貞が近寄り、背中を叩く)

江 (我慢出来なくなり、振りかえり、たてつづけに頭を振り、ああ、ああの嘆息をし、つぶやく) ああ、ああ、実際こんな時にまで、なんて芝居気たっぷりなんだ! いったい何の芝居をぶちはじめ——

彩 (小声で) あなた、また気が狂ったの!

皓 （ゆっくりと瑞貞を押しやり）儂には構わんで好い。（一同の方へむき直り）儂はお前達を責めるのじゃない。責めてみたところで、何にもなりはせん。（満面、絶望した者の、憐れな顔つきとなり、だが、憎々しげな口調で）どいつもこいつも、禄でなした。口ばかりが悪達者な役立たずめだ。（不意に勇気が出）江泰！ お前、お前も——

〔江泰は幾分、顔色が変わったようでもある。〕

彩 〔江泰の発作をおそれ〕泰！（江泰は黙々として声を出さない）

皓 （半ば責めるようにも、また半ばは、愚痴となり）一日中、金儲けばかりを考え、一日じゅう、夢ばかり追っているだけだ。少しも義理人情や世故を弁えぬ。長男坊主同様、無駄学問をした。何がお前たちを害したかは解らない。——が、お前たちは二人共——（不意にひどく咳きこみ、自分で胸を二度たたく）

彩 ねえ！ ねえ！

江 （むやみにしゃべり続ける以外に、仕様がなくなり）そんなことを言ってみたって！ そんなことを言う必要があるんですか？——

いまさらッ！

彩 おとうさま おとうさま
爹！ 爹！

皓 スーイイ 思慙！ お前は子供もあり、しかも^{しうとめ}婆婆になってからでも、もう二年もたっている。その上、お祖母^{ばあ}さんとまで呼ばれようとしている。

（強いて自身の怒りを抑え）儂はお前を叱りはせぬ。落度があるとしたところで、今日^{いま}に始まったことではない。（語るにつれて、惨めな自己嫌悪が増し）今後、家を売った後は、お前方は儂は死んだも同然、儂という人間はいないもの——と考えなさい。儂は——

（溘然と泣きはじめる）

彩 （堪えきれず慟哭する）おとうさまあ おとうさまあ
爹！ 爹！

思 （早くから血相を変えていたが）おとうさま
爹！ わたくしには、お父さまの仰言ることが解りません。

皓 （思いもよらぬ言葉なので）お前、お前は——

彩 (憤激しきって) 大^{おねえさま} 嫂! それでは、あんまり、^{おとうさま} 爹 をないがしろになさいますわ!

思 (くってかかり) 誰が^{おとうさま} 爹 を、ないがしろにしましたッ?

彩 (温順しい人間も、こうおいつめられてはつい声を大きくし) 人間として、そんな良心のない話ってないわよ!

思 誰に良心がないのよ。誰にないのよッ? 天に雷様⁽¹⁵³⁾ があり、眼の前には、^{ダイニ} 爹 がいらっしゃるわよ。^{彩さん} 妹妹! さあ言いなさいッ!
誰にないのよッ? 誰にッ!

靈 (同時に、困りきって) ^{お母さん} 媽!

彩 (思慮の見幕に気おされ、怒りに震えながら) あなたは、^{おとうさま} 爹 を^{につち} 二進も^{さつち} 三進もいかないようにしてるじゃありませんか?!

江 (しょうことなしに) 喧嘩しちゃ、駄目だ、^{ふたりとも} 小姑子・嫂嫂們。

彩 あなたは^{おとうさま} 爹 を追いこんで、このお年寄りのお棺まで、無理やり売り払ってしまおうとしてるじゃありませんか!^{おとうさま} 爹 をいじめつけちゃって——

皓 (^{ウエヌツアイ} 彼女を押しとどめ) ^{ウエヌツアイ} 文彩!

思 (当てこすって) その通りですとも! ええ、わたしが、^{おとうさま} 爹 をいびってますよ。お父様をいびりつけて、^{すね} 脛を嚙ってますよッ!

(喋りながら立ち上り) お父様の脛を飲んでますよ! 朝から晩まで、ただ飯を食べてッ!! やって来たと思ったら四年も居座っちまってさ! (言いながら、立ち上り) おまけに自分の^{つれあい} 姑爺まで喰えこんじゃってさ! ——

靈 (傍で、一句ぎり毎にやめさせようとしていたが、非常に気を揉み)
^{お母さま} 媽! ^{お母さま} 媽 ってば——、やめてッ——

江 (突然、かっとなり) 馬鹿言えッ! 俺は金を払ってるんだぞッ!

皓 (息を^{あえ}喘がせつつ、彼等を制して) 騒いじゃいかん!

(153) 証言したり、誓いをたてるときに、このことばを言う。蓋し中国では、嘘を言えば雷にうたれて死ぬ——との言い伝えがあるからである。日本人のよく言う「神様が見ていらっしゃいますわ」の言葉に当る。

思 (曾皓と同時に) 金を払った? ^{フン} 哼! あんたッ! たったの——

皓 (言い争う中で、足を踏みならして怒鳴る) ^{スーイイ} 思懿! もうやめなさい!
い! (突然、豹変し、ほとんど泣くように) ^{わし} 儂は、^{わし} 儂はもうすぐ死ぬんだ!

[一同、急に静まる。思懿の低い悲しげな^{すす} 嘔り泣きの声のみが聞える。]

[日、暗みはじめる。沈黙の鬱悶気の中に、慄方、大客間の入口から登場。小麦色のサージの^{あせせ} 夾袍を着、顔の輪郭は一ヶ月前に比べてやや瘦せてはいるが、その為^{くら}に眼は一層大きく輝いて見え、その中に言い知れぬ鎮静と平和と、確固たる気構えとが感じとられる。]

[彼女は右手にランプを持ち、左腕には画軸を二本、抱えている。彼女が入って来たのを見ると、瑞貞は急いで歩み寄り、ランプを受け取って、小声でその耳元に二言三言、囁いたようである。慄方は黙々とうなずく。が、思わず悲し気に眼前のしらけきった一座の顔を見まわす。そして、その軸を二本、磁器の^{かめ} 甎のなかにたてかけ、再びふりむくと、急ぎ書斎の門から退る。瑞貞は終始、慄方を見守る。]

皓 (嘆息し) お前たち、裸でなしたちが! ——今になって、何を言い争うことがあるのか?!

瑞 ^{おじいさま} 爺 爺! お部屋にお帰りになって、お休み下さいませ!

皓 (感動して) ^{レイヂェス} 瑞 貞や^{タイムン} 霆 儿たちを見なさい! 今更らどの^{つら} 面さげて喧嘩することがある! (慨然となり) もう何も言うな。一緒に暮すのも、あと^{どれぐら} 幾日もないだろう。思懿! お前、^{スーイイ} 杜 家の^{トウのところ} 者に言っておいで! あの、——(ちょっと口に出ない) あの^{おめでた} 棺材を担ぎ出せ——とな。先ず、まあ暫らく、(惨澹たる様子になって) この^{うち} 邸を残しておくこととしよう。

彩 ^{おとうさま} 爹!

皓 杜家の意向は、さっき、^{スワフアン} 慄 方から全部きいた。

彩 誰が^{スワさん} 慄 表妹に話させたんです。

思 (昂然と) わたしよッ!

皓 もうそんなことを、かれこれ言いあうんじゃないッ!!

江 (忸怩たるものがあった) じゃ、^{おとうさん}あなたは、やっぱり^{あいつたち}彼等にやっちゃうんですか?!

皓 (頷く)

思 (口に出しかねていたが、結局、言い出し) でも、^{トウさんとこ}杜家の人、今日すぐほしいというんですが。

皓 ああ、好いとも。好いとも。先方の言うとおりにしてやれ。あの棺には運の好い人間^{はい}を^{はい}入らせてやりな。(思懿が立って話しに行こうとした時、思いがけず、曾皓は江泰の方に振りむいて) ^{ガヤンタイ}江泰! お前、大急ぎで、^{あいつら}彼等に担ぎ出させなさい! 今、直ぐッ! (悲しさ限りもない——という様子で) ^{わし}儂は、^{わし}儂はもう、^{しんき}あんな辛気くさいものなど、二度と見たくはないッ!! (うなだれて黙ってしまう。思懿、やむなく足をとめる)

江 (油然とばかり、憐憫の情、湧きあがり) ^{とうさん}爹! (二三歩、歩いて立ち止まってしまう。)

皓 行っといで! 言って来とくれ!

江 (突然、振り返り、曾皓の前にゆき、非常な善意から言い始める)
^{おとうさん}爹! こんなことで、何もそう悲しがることはありませんよ。人間は死ねば死んじゃうんですよ。何百遍も漆を塗ったお棺で眠ったところで、それがどうだっていうんです。同じことじゃないですか。(元来は曾皓に同情した慰めの口調だったものが、何時もの癖が出て、次第にそれを忘れてしまい、^{くちぶり}口吻が変り、曾皓にむかって、滔々と弁じはじめる) こういうことは、あなたは未だ理解していませんよ。例えばですね、あなたが、今日死んだとすれば、ですね。漆を一ぺんぬっただけの棺に眠るとして、それがいったい、どうだって言うんです。

彩 (彼のおしゃべりが又はじまったと知って) ^{ガヤンタイ}江泰!

江 (文彩を振り返り、うるさそうに) 黙ってる! (曾皓の方へむき

直り、にこやかに、至極真面目に注告しているつもりで) あなたが死んでしまって、眠る棺がないからって、それがどうだっていうんです。(指さし、ひとりで頷いて) そんなことは、全部一種の習慣なんですよ。一種の考え方なんですよ! (話すほどに、次第に得意になり、最初は同情と慰める積りだったことなどきれいさっぱり忘れてしまい、手振り身振りで「講義」をはじめ) 例えばですね、(ソファーに腰掛け) 僕がこういう風に腰かければ恰好がいいでしょう。(よい思いつきだというように) じゃ、こんな風に(突然、太腿を椅子の背にのせ) 掛ければ、恰好が悪いでしょうかねエ?! (思慮にむかい) ^{おねえさん}大 嫂! (自身の言葉にほろ酔い気嫌その儘に陶醉し切って、先刻のいざこざも忘れ) 僕の、これは、たとえなんですがねエ! (指さし) あなたが着物を着ていると綺麗で、着物を着てなかったら、見っともないでしょうかねエ?!

思 ^{タイさんツ}姑老爺!!

江 (相変らず喋り続けて) どっちも、どうとも言えませんよねエ。というのは、そう思うからなんで。そういう習慣だからにすぎないのであります。

皓 (口をはさみ) ^{デキヤンタイ}江 泰!!

江 ^{ひと}(他人に口を入れさせず、立板に水と、喋り続ける) 例えば僕にしてもですね。(腰を下し) 僕が死んでしまう。(文彩を見返り、冗談とも本気とも見分けのつかない調子で) 君は僕を火葬にし給え。焼き終わったら、骨の灰まで悉皆、海に投げ捨ててくれ給え。そして水葬にってしまうんだ! きれいさっぱり、墓さえ無くしてしまうんだ!! (まるで壇上で講義している調子になり) これ又一種の考え方にすぎぬのでありまして、こういうことも亦、一つの習慣となり得るわけであります。ところで、^{上父上} 爹! あなたは今日――

皓 (これ以上我慢しきれず、^{さえぎ}大声に遮って) 江泰! 君がどんな風に死のうと、どう葬られようと、それは全部、足下の貴意にまかせる。
(^{にが}苦り切って) ^{大わづらい}大病が治ったばかり、その上今日は、僕の誕生のお

祝の筈の日だ。そういう種類の話は実に以って、あまりにも――

江 (依然として至って穏やかに、抗議されたとも思わず) 結構! 結構! あなたが御賛同下さらなくとも、――どうでもよろしい。どちらでもよろしいのです! 人間には、各自、――意見がありますからね。実のところ、僕はとっくに喋りすぎていると、解ってはいたんです。先刻も、僕も、喋りながら心の中では、「もう言うな」「喋るな」ってつぶやいていたんですがねえ。(申し訳なさそうに) 僕の口がどうしても思うようになりませんでね。

思 (ずっと悲嘆にくれているように見せていたが) じゃ、姑老爺!^{タイさん} これでもうやめときなさいよう。(立ち上り) では、^{おとうさま} 爹! わたくし、わたくし――(言い出せないでいるように、自身の眼頭を拭き) お申しつけのように、^{トウさんとこ} 杜家の者に申し伝えましょうね?!

皓 (絶望的に) 好かろう。それ以外に、仕方あるまい。

思 はい! (二三步あるく)

彩 (傷心のさまで) ^{おとうさま} 爹!

江 (突然、立ち上り) よし給え。君たち、ちょっと待ち給え。絶対待ってくれたまえ!

[江泰、横とびに、自分の寢室へ馳けこむ。思懿も足を止める。]

皓 (呆氣にとられ) また、どうしたというのだ?!

[張順、大客間への戸口から登場。]

張 ^{となり} 杜家から、また使者が参りまして、^{つかい} 易者に^み 見て貰ったところ、あの^{トウコンコワヌ(154)} お棺は今夜の真夜中、寅の刻までに杜公館へ担ぎ込むよう、とのことだそうで、^{タフナイナイ} 大奶奶に^{たず} お訊ねして――

彩 お前――

(154) 日本の「公邸」または「官邸」に当るようなことばとして「公館」がある。^{コンコワヌ} 但し、当時の中国のそれは、こういう場合、日本の様に「公」の意味の厳格なものとしては使われていない。絶大な金力があり、従って何等かの意味で大きな権力のある人が、堂々たる立派な邸宅を構えるとき、その邸宅のことを「公館」といったりもした。なお、もう一段と古い時代には「府」とも称した。^{おおやけ}

〔江泰は破れた羅紗の中折帽ソフト(155)を持ち、ステッキをさげて、急ぎ出てくる。〕

江 (大はりきりで張順となりにむかい) お前、杜家の大馬鹿野郎共を、客間で、もう少し待たせて置けよ。そして、金はもうすぐ来る。うちの老太爺おめでたのお棺は家に置いて薪に叩き割って焼いちまうんだ、——って言ってやれよ!

彩 あなた、どうして

江 (曾皓むかにおとうさん対し熱心に) 爹!! 少しお待ちになって下さい。僕、友人のところへ行って来ます。(文彩チヤンテイインシヤイにむかい) 常鼎齋チヤンテイインシヤイが、今公安局長あいつをしてるんだ。彼のところへ行けば、きっと何とかなるよ。(曾皓にむかい、非常に自信ありげに) この親友は、僕とはとても仲が良かったんですから、これ位のことなら問題になりませんよ。(尤もらしく整然と) 第一に、彼奴にすぐ杜家に交渉させ、今後は、ここへ、これ以上無理難題を持ちこませないようにさせます。

第二に、万が一、杜家がこの調停に耳を藉かさない様なら、暫時、彼に金を融通して貰うことにするんです。(軽視した口振りで) なに、これ位の小金なんぞ、全然、問題じゃありませんよ。全ぜん一せん然!

彩 (殆ど自身の耳を疑うように) 泰! ほんとうに出来るの?

江 (ステッキで床を叩き) あたりまえさ! 勿論出来る。じゃ、爹!おとうさん 僕行って来ます。(思懿おとうさんにむかい手を挙げ) 大嫂! 一言、いっておきますがね。僕、保証しますよ。絶対、成功です。

(足取りも軽く出てゆく)

思 (この一陣の突風の襲来に、彼女もすっかりめんくらっていて) じや 爹! このお話は——

彩 (喜びきって) 爹!

(155) 日本でも中折帽・ソフトなどと称して、昭和初期大流行をみた。当時はインテリーの象徴のように思う向きも多かったが、中国ではこれを所有出来るのは極く限られた富裕階級の、しかも欧化した有識者とされていた。そういう社会背景を踏まえて、作者は江泰なり曾文清なりの人柄を読者に掴ませるために、この小道具を持ち出している。

〔江泰、大客間への戸口の敷居をまたいだが、又、せかせかと立ち戻る。〕

江 (文彩にむかい、慌だしく手を差し出し) 僕、懐中無一文なんだ!

彩 (あわててかくしから、ばら銭を掴み出し) ここに!

江 (一見し) 三十一——

〔江泰、大客間への戸口からさっさと退場。〕

皓 (彼に翻弄され呆気にとられ、ポーッとなっていたが、この時、漸く一息ついて) 江泰ときたら、一体、どうしたというのだ?!

彩 (ずうっと夫を崇拜しきって来たが、ここで、皆から本気に相手にされ、ないのを恐れ、曾皓にむかって懸命に) 爹! どうぞ御安心なさって! あの^{ふたん}人、平生からそうそう出鱈目は言いませんでしたのよ。今、何とかなる。——って言った以上、きっと何とか致しますわ。

皓 (半信半疑の^{てい}) うん?!

思 (自制しきれず) 哼!^{フン} わたしの見込みじゃ——。(不意にまた、自身をおさえ、曾皓にむかって、不自然な笑顔で) それも亦、結構でございますわね^{テイエ}。爹! このお棺のことは——

皓 (あたかも、一筋の希望と慰めを得たものの様に、ため息をひとつ) それも結構なことだろう。「溺れる者は藁をも掴む」というものだ。^{あいつ}彼のいう通りにしてみるか!

張 (思わずも喜色を浮べ) では^{タアナイナイ}大奶奶! わたしはすぐあの人達に——

思 (長時間、自身の憤懣をおさえていたので、つい不機嫌な表情となり、さも憎々しげに) お^{さが}退りッ! お前に、どうしろと言ったかね?!

〔思懿、ひどくプリプリして、大客間へ去る。〕

皓 (迫いかけるように声をあげて) 思懿!^{スーイイ} 杜家の者には、矢張り穏やかに話すんだよ。どうあっても、今暫らく待って貰うようにな!

思 はい。

〔思懿、大客間への門から退場。張順も^{さが}続いて退る。〕

- 彩 (喜色満面) 瑞貞レイヂョウ！ あなたには、姑父おじさまが、少し気違いじみてい
ると思えていたでしょ。あの人はこういう時になるとやっと――
- 瑞 (心中に煩悶を抱えているので、口先きだけで) そうですわ。姑おば
姑さま！
- 皓 (希望を持ちはじめ、文彩の言葉につづいて) ああ！ ただもう、
あのお棺めでたさえ残して置けば、有難いんだがなあ！ (思わず振り返り)
暉テイアン！ お前は見込があると思うかな?!
- 暉 (同様に、口ばかりで) 有ります。爺爺イエイエ！
- 皓 (うなずいて) この事がきっかけで、これから家の運勢うちが好転して
くれば、助かるんだがなあ！ 噫うん！ 殊によると、そうなってく
れるかも――な。(立ち上ろうとし、瑞貞、傍たすに寄り扶ける) お前、
体の具合はまずまずかな？
- 瑞 大丈夫です。爺爺イエイエ！
- 皓 (立ち上り、瑞貞を眺め、思い入れていの体で) お前ももうすぐ、母親
になるんだなあ。(文彩は暉たすにも祖父を扶けにゆくよう、目くば
せをし、暉は黙って近づく。曾皓は孫とその嫁を眺め、不意に、
無限の希望を抱き始める) お前達若夫婦は、どうやら、お似合いら
しい。これからはお前達二人、力をあわせて、この家を立て直して
いっておくれ！
- 彩 (目顔で、返事するように指示して) 暉テイアン！
- 暉 はい。爺爺おじさま！ (再び答え終るとちらと瑞貞を見る)
- 皓 (曾家の三代目に期待する口吻くちぶりで) 今度、お棺を家に置いておくこ
とが出来、家も売らずに済んだら、来年の春には儂わしはお前らのため
に、もう一度外に出て働いてみよう。お前らの子供のために、もう
ひと骨折って働こう！ (ハンカチで眼尻をこすり) ああ、只もう
御先祖様が儂わしの健康を御加護あって、儂の身体がよくなりさえすれ
ば!! お前らも一生懸命、儂のために祈っておくれ！ (書齋の方
にゆく)
- 彩 (傍たすに寄って曾皓そごうを扶け、その興を助けるように) そうですよ。年

があけて春になればお父様のお体もよくなるし、^{ルイヂエヌ}瑞 貞もお父様に
^{ひいまご}曾孫をお眼にかけるでしょうし、お兄さんも——

〔書齋の小門が開き、慥方が現れる。たった今、花を生け終ったと
 いうびしょ濡れの手に、まだ二三本残りの花を持っている。〕

慥 (片手で軽く、顔にほつれた頭髪を撫であげ、にこやかに) お部屋
 にお帰りになって、お休み遊ばせ、^{お義父さま}姨 父! お居間、もうすっかり
 片付けておいてありますのよ。

皓 (心地よさそうに) 結構、結構。(文彩に^{こた}頷き応えつつ、外へむか
 って、歩き出す) そうだなあ。来春を待つんだなあ。——^{ルイヂエヌ}瑞 貞!
 来年の春になったらな、来年の——

〔瑞貞、曾皓を扶けて書齋の戸口までゆくと、慥方を見返り、こっ
 そりところらの部屋を指さす。慥方は心得顔に頷き、代って曾皓の
 腕をとって扶けて出てゆく。文彩が後につきそってゆく。〕

〔暈儿は部屋の中央に立ちつくして、動かぬ。瑞貞、彼を眺め、書
 齋への入口から再び黙々と立ち戻る。〕

瑞 (小声で)^{ティーン} 霊!

霊 (彼女の眼を直視し得ないような様子で、悲しそうに) 君ィ! 明
 日の夜明けに出て行っちゃうの?

瑞 (矢張り、彼を見ないようにして、低く沈んだ声でゆっくりと、だ
 がしっかりと)^{ソメ} 唸!

霊 ^{ユアヌさんとこ} 哀 家の人達と一緒に行くの?

瑞 ^{ええ} 唸! 一緒に出かけるの。

霊 (あたりを見廻し、かくしから探り出し) あの^{しよるい}証書、もう書いと
 いたよ。

瑞 (暈儿を凝視して) そう。

霊 (紙を一枚取り出し、無意識にあたりを見廻してから、小声で読み
 下す) 「離婚人^{シイエルヂエヌ} 謝 瑞 貞・曾 霊^{ツオンテイん}、われら二人は幼年にして結婚し^{われら二人は幼年にして結婚し} 意見合^{意見合}わ^わず

共に同居を継続しがたく 今後二人はみづから夫妻の関係を離脱し
 実難継続同居、今後二人自願脱離夫婦——」

瑞 (切なくなり) もう、読まなくて好いわ。

- 霊 (一瞬もじもじするが、取るべき手続——とでも思い込んでいるらしく、ささやくように) じゃ、署名、捺印して——
 瑞 後でお部屋でしましょうよ。
 霊 それでも好いよ。
 瑞 (心からの悲しみで) ^{アイーン} 霊！ ほんとうに済まないわ。あなたにこんな証書を書かせたりして。
 霊 (今まで、彼女に対して、このように愛着を感じたことはなく、口がきけなくなり) ううん。——君は——この二年間、我が家で苦勞このうちしつくしたんだもの。(突然) 子供は欲しくないの？ 君ィ！ 慄スウ娘イイに言ったんだってね!!
 瑞 (その思い出には触れたくない様で) ^{さま} 嗯！ ^{ウズ} 彼女が子供に——って作って下さった着物も、みんなお返しするつもり。どうして？
 霊 僕、家うちじゆう中で一人ぐらい知ってて貰っても好いと思ったから。
 瑞 (心から気に掛けている様子で) ^{アイーン} 霊！ わたしが出て行ったら、あんた、どうするの？
 霊 わからない。(さびしげに) 学校も、今じゃ、行けなくなっちゃっ(156)た。
 瑞 (いっばいの同情で) あなた、悲観しないでね。
 霊 するもんか。
 瑞 (なぐさめ) これからは、始終、お手紙、出しあいましょうね。
 霊 そうしようよ。(涙、溢れ落ちる)
 [戸外で、円児が大声で、^{ルイヂェン}「瑞 貞！」と叫んでいる。]
 瑞 (辛いのを我慢しつつ) 悲観しないでね。！ どんなことでもみんないろいろ苦しんでみて、はじめて「わかる」ってことを、わたしたち人間は贖あがなうことになるんだわ。
 霊 「わかる」ってことは、ほんとに大変なことなんだなッ！

(156) 解放前の中国では、小学校でさえ非常な学費を要するため、余程の金持でないと子供を学校へあげられなかった。まして中学ともなれば実に限られた小数の富裕階級の子だけであった。

〔袁円が口笛をふきながら、至極、上機嫌な様子で、大客間への扉から、入って来る。グレー、ユバルト、白の三色の混った、膝小僧かきりの^{スカート}裾子を穿き、上半身は頭から被って着る薄手の真紅の短袖の毛^{セーター}衫、両脚は依然まる出して、白帆布の^{ズック}運動鞋を履いている。今の今まで荷物の整理に忙殺されたらしく、髪もやや乱れ、両頬も^{ほがらか}かっかと赤い。相も変わらず^{ほがらか}明朗で嬉し気で、にこにこしている。片手には例の「^{クワドウ}孤独」をいれた鳥籠をのせ、片手では、ポロポロに破れた例の金魚の大^{シラエツト}尻をぶらさげ、そのうえ腋の下にはボール紙を剪り抜いた北京人の^{シラエツト}剪紙を挟んで持っている。

円 (大きな声で) ^{ルイザエヌ}瑞貞! ^{フーチン}うちの父親が長いこと、あなたを探してたわよ。父さんはね、あなたの荷物——

瑞 (慌てて制止し、微笑んで) おねがいッ! お声を小さくしてね! 好いこと!!

円 (はしゃいでいて、耳に入らなかったが、はっと気がつき、周囲を見まわしてペロリと舌を出し、いたずらっぽい表情をしてみせると、すぐ咽喉をおしころして、一言、一言^{うちのとうさん}内緒声で、) 我父親がね^エ——あんたとね^エ、——あんたの友達の荷物はね^エ——用意出来るでしょうか——って!

瑞 (その様子のおかしさに釣りこまれてつい笑い出し) 片づいちゃいましたよ。

円 (そのまま^お庄しころして) お父さんはね^エ——ただね^エ、あなた方をね^エ——途中まで送ってあげられるッ——だけですって——それから^エ——(フッとひと息ついて、普通の声に戻り、) ああッ、苦しくって、死んじゃいそう! やっぱり、一緒にいらっしやいよ。^{おとうさん}我父親、まだあなたに、いっぱい、きくことがあるんですって!

瑞 (気軽に) 好いわ。行きましょ。

円 (全然帰ろうとはせず、品物を抱えて曾^{ツメンテイ}霆の前に近づき、「一大関心事あり」といった恰好で) 曾^{ツメンテイ}霆! あなたのお父様がお留守なんだからね。(その破れ「金魚」の紙尻を持ち上げ) この破れた尻

は、あんたの ^{お母さん} 媽にお返しするわよ！（紙^{わき}洞をテーブルの傍にたてかけ、次に、鳩籠を取りあげ）この鳩は ^{スウジイキオヂイェ} 懐小姐にお渡しするの！（鳩籠を卓上におき、そこでやおらその「北京人」の ^{シルエツト} 剪り紙をとりあげ、にこにこして）この「北京人」は、わたしからあんたへ、記念にあげるの、どう？ 要りませんか？

寔 （一ヶ月余りの、袁円に対する感情など、とっくに忘れ去ってしまっているように、頷いて）うん。貰っとく。

円 （眼ばたきし、何かまたいたずらを思いついたらしく）明日、朝、明るくなったら、わたし達、出掛けるのよ。あんたにねエ（大客間への ^{ゴージキヌ} 隔扇を指さし）あの扉の向うへ置いといてあげるわ。

（瑞貞に）行きましょ、瑞貞！

〔円儿、片手にその ^{シルエツト} 剪紙を持ち、片手で瑞貞の背中を推しながら、大客間への入口から退場。〕

〔この時、思懿もその ^{隔扇} 門から入って来て、バツタリ彼女たちにあう。瑞貞は姑を見、はっとするが、とたんに円儿から「さあ行って！行ってッ！」と、押し出されて出て行く。〕

〔寔儿は、彼女たちの出て行くのを眺め、微かに嘆息をつく。〕

思 （振り返り、横眼でつと見やり、^{ルイヂエヌ} 寔儿に近寄って）瑞貞と来たら、この頃、いつも家に居つかないで、友達のところへ許り行ってるけど、お前、^{あれ} 彼女が何をしているのか、知ってるの？

寔 （ちらと彼女を眺め、首を振り）知りません。

思 （自身の息子のぼんやり加減に腹がたつが、とってどうしようもなく、恨めしげに愚痴る口吻で）あれまあ、^{あれ} 嫁はお前の ^{よめ} 嫁さんなんだよ。^{フィインアル} 坊や！ わたしだってそうそうお前のことで、腹をたてきれないよ。ちとしっかりおしよ。（不意に）^{あれ} 彼女たちは？

^{シヤンフアン(157)} 上房へ行ったんです。

思 （くやしそうに、訴える如く）^{フィインアル} 寔儿！ お前、さっき、お母さん

(157) 前出。邸内の最も中心となる。最高権力者の居間の建物。

がどんなにあの連中に虐められたか、見てたろう！

霆 (母親を眺め、うなだれる)

思 (ハンカチを取り出し) ^{かあさん} 媽 は不倖者なんだよ。お前の ^{とうさん} 爹 が、わたし達を捨てて出て行っちゃってさ。 ^{かあさん} 媽 は一日じゅう、こんな辛い目にあってる。それもみんなお前達のためなんだよ。(涙でぬれた眼を ^{ぬぐ} 拭う)

霆 ^{おかあさん} 媽、泣かないで！

思 (霆児を撫でながら) これからは、何でもみんな ^{かあさん} 媽 に言うんですよ。(怨めし気に) ^{ルイヂエヌ} 瑞 ^{なか} 貞のお腹 ^{あかん坊} に来た子のことだって、もし ^{かあさん} 媽 が先月、気付かずにいたら、お前たちは、きっとまだ、わたしに言わなかったでしょ。(指さし) お前達二人、いったい、どういう気にいるのよう！(気になってならないらしく) わたしが、^{ルイヂエヌ} 瑞 ^{あのこと} 貞に飲むように言っといたあの安産の薬、彼女、飲んだかい？

霆 まだです。

思 いえ、わたしの言ってるのは、^{おととい} 一昨日わたしが ^{ルウオ} 羅先生のところから頂いて来た、あの処方箋のだよ。

霆 (困っていたが、やり切れなくなつて) まだ飲んでないんですッ！

思 (勃然と顔色を変え) どうして飲まないのよッ?! (はげしい声で) 飲ませなさいッ！ 飲ませなさいッたら!! それでも ^{あのこと} 彼女、言うことをきかなかつたら、わたしに ^{おつしや} 仰言い。わたしがどんな風 ^つ に注ぎこんでやるか——見ておいで！ ^{ルイヂエヌ} 彼女が、自分は曾家 ^{もの} の人間じゃないと思っていたって、 ^{あれ} 彼女の ^{はら} 腹の中の肉塊 ^{こども(158)} は、曾家のものだって、思い知らせてやらなくちゃ。今のところ、 ^{なか} お腹の中の ^{あかん坊} 子供 ^{あのこと} の為 ^{あれ} を思えばこそ、何もかも、 ^{あのこと} 彼女の ^{あれ} 勝手にさせているんだが、 ^{あれ} 彼女と来た

(158) 中国ではこの肉塊・肉などという表現はよくつかわれる。従来の日本人がどちらかというところ「ほのか」で「淡白」な表現を好んだのとちがいゴッとするように現実的である。この両者の「ことば」における感覚的な表現の相違は、従来あまり注目されず、論じられてもいないが非常に著しく、対照的である。

らあろうことか、ますます増長してッ！（不意にまた声をおとし）

^{ティンアル} 霏 儿！ お前ボヤボヤしてるんじゃないよ。わたしは、どうもこの頃、^{ルイヂエス} 瑞 ^{おか} 貞は少し奇怪しいと思うんだがね。奇妙にこそそそして、やたらに変な友達とつき合うし——（更に声を低め）わたしは、^{あれ} 彼女が品物^{もの}を持ち出しゃしないかと心配でね。夜は、表も裏門も全部鍵をかけさせてはいるんだが——。お前、気をつけなくちゃだめだよ。わたしが案じているのは——

〔^{せんじぐすり} 慥方が薬 罐 を手にして、書斎の小門から登場。〕

慥 （にこやかに）^{ルウオ} 羅 先生の処方のお薬、煎じ上りましたわ。

思 ^{スウフアン} （彼女を見つめる。）

慥 （自分を見つめて口もきかないので、再び）ここでお飲みになりますか？

思 （冷たく）先ずわたしの部屋の、焔炉の上ののせてさめないようにしといてよ！

〔慥方は薬を持ち、霏儿の前を通過して思懿の部屋に入ってゆく。〕

霏 （薬罐の中の薬湯をちょっとながめ、いぶかし気な、腑に落ちぬ面持ちで）^{お母さん} 媽！ どうして ^{ルウオ} 羅 先生のあの処方箋、^{おかあさん} 貴女も飲むの？

思 （ちょっと顔色をかえ、そわそわするが、しかしまた、すぐ平静を取り戻し、^{かあさん} 有耶無耶に）^{かあさん} 媽—— 媽 はね、この頃、身体の具合もあんまりよくないんでね。 （話題を探して）この二三日は、ありがたいことに ^{スウおばさん} 慥 嬢に世話になっちゃってね。——（だが、すぐ語気を改め、咳払いをひとつすると）でも坊や！（再び暗い顔付になって、恨めしげに）^{スウおばさん} 慥 嬢って人はね、（首をふって）^{あいつ} 彼女はね、^{あいつ} 彼女と来たら——

〔^{スウフアン} 慥 方、寢 室から出て来る。〕

慥 ^{ビヤオサオ} 表 嫂！ ^{おとうさま} 嬢 父があなたを、お呼びになってますのよ。

思 （相手にする様なしな様なうなずきかたで、振り返って霏に）

^{ティンアル} 霏 儿！ ついておいで。

〔霏川、思懿に従い、書斎の小門から退場。〕

〔暮色、更に深まる。戸外に一二声、雁の啼き渡る声、しみじみと哀れに侘しく、晩秋の暗みゆく空をかすめる。〕

愫 (軽く吐息をひとつ。幾らか疲れた様子を見せる。ふと卓上の鳩籠に気づき、思わず手を伸して持ち上げ、じっと中の白鳩——その名を「孤独」と呼ぶ鳩——に見入る。眼のあたり、涙にうるむ憂愁の浮ぶにも似て、しかもその鳩を愛撫するかの如く、微かにひとすじの凄惨なほほ笑みがあらわにされるのであった。)

〔この時、瑞貞、ベビー服をぎっしり詰めた藤の小バスケットを提げて登場。それを別の小卓上に、そーっと置くと、こっそり愫方の傍に近づく。〕

瑞 (小声で) 愫 嬢！

愫 (ちょっと驚き、体をねじり) あなた来てたの?! (鳥籠を下に置く)

瑞 あなたのお部屋に置いといた長いお手紙、御覧になった?

愫 (頷き) 嗯！

瑞 わたしのこと、お怒りにならないの?

愫 (哀し気に、しかも慈愛にみちて) いいえ、——(突然) ほんとうに、出て行くの?

瑞 (名残り惜し気に) はい！

愫 (ため息をひとつ。引き止めるのでなく、別れ辛くて) 行かないでよッ！

瑞 (とたんに、激しく興奮して) 愫 嬢！ あなたは、これ以上まだ辛抱しろって、仰言るの?

愫 (何かを思い出しているかのように、面上にはふと輝きが走り、ゆっくり、しかもきっぱりと) 人間には、どうしても我慢できなくなる時があるものだ——ってこと、わたし、わかってるの。

瑞 (瞳に期待の色がきらめき、力いっぱい彼女の青白い手を握りしめて) じゃあ、貴女は?

愫 (ふときらめいた輝きはまた消え失せてしまい、淋し気に瑞貞を眺め、哀しく静かに) 瑞貞！ あとは、言わないで頂戴！ あなたが

い
去ってしまったら、わたし、なおのこと^き佻びしくなるわ。これからはわたし、もう何も口をきかなくてもよくなってしまおうわ。わたしはなおさら——

瑞 (更に固く^{スウフアン}彼女の手を握りしめて、ゆっくりと彼女を推して腰掛けさせ) だめ、だめだめッ! ^{おばさま} 懐姨!! こんな風じゃいけないわ。あなたは、一生こんな風じゃいけないわよ。(切迫した様子で懇願する) ^{スウイイ} 懐姨! わたし、もう直ぐ出て行くのよ。どうしてわたしにきれいさっぱり打ち明け話をして下さらないの? どうしてあなた^{おばさま}のその御気持を——(そこはかとなない暮色の裡に、涙の光る懐方の、大きな眼にふと気づくと、突然自己を抑制してしまう)

懐 (ゆっくりと) あなた、わたしにどう言え——と、仰言るの?!

瑞 (我知らず、もじもじして) 例えばあなた御自身が、あなたが、あなたが——、(突然) あなたは、どうして此家^{ここ}を、出て行かないんです?

懐 (索漠と) わたし——出て何処へ行く——の?

瑞 (興奮して) 行く所なんて、いくらだってあるわ。第一に、わたしたちと一緒に^{おばさま}行けるじゃありませんか?!

懐 (首を振り) いえ、わたしはだめ!

瑞 (^{スウフアン}彼女の傍に腰を下し、^{おばさま}熱心に) あなたは、わたしの差し上げたお手紙、御覧になったの?

懐 見たわ。

瑞 わたしの言うこと、間違ってます?

懐 間違っていないわ。

瑞 (笑い出し) じゃあ、どうしてわたしたちと一緒に^{おばさま}出てゆかないの?

懐 (語調は低く緩やかながら、しかも言い方はきっぱりと言い切って) わたしは行かないの!

瑞 どうして?

懐 (^{じやくねん}寂然と^{ルイジエヌ}彼女を眺め) 駄目なの。

瑞 でも、どうして駄目なの？

愫 (言おうとする。但し、また再び——、そして次にはただ静かに首を横に振るのみ)

瑞 ねえ、理由を仰言るものですよ！ ^{おばさまア}あなた！

愫 (困り切って) わたし——只わたしねえ、^{ここ}この家での仕事が、まだ ^{おわ}了ってしまっていないように思えるのよ。(「了」の字は、ここでは「完結・完了」の意味にとること) (カッコ内は原作者の注)

瑞 わたしには、^{わか}解らないわ。

愫 (ほほ笑んで立ち上り) ^{わか}解らなくてもいいわ。言ったって解らないでしょうしねえ。

瑞 (口をきったからには——と、追求する) じゃ、どうしてあなたは、彼を探しに行かないんです？

愫 (ちょっと、と惑い気味に) あなたの言うのは——

瑞 ^{おとうさま}爹 ^{テイエ}のこと。爹を探しに行らっしゃらなくちゃ！

愫 (また気が静まって来て、半ば考えこみ、半ばは追想に耽るように、ぼんやり前方を見詰め) どうして探しに行かなくちゃ——ならないの？

瑞 あなたは、^{あの方}彼を愛してはいらっしゃらないの？

愫 (^{うなだ}項垂れる)

瑞 (一言は一言と、より強く) それなら、なぜ、^{あの方}彼を探しにゆこうとお思いにならないんです？ どうして、そう思わないんです？

(ズバリと) ^{スワイイ}愫嬢！ わたしもう、今迄のようなボンヤリじゃなくなつたのよ。こんなことは、^{ひとつき}一月前のわたしなら、とってもお訊ね出来なかったわ！ あなただって、わたしが気づいている——位のこと、御存知なんですよ。(重々しく) わたしはもう、出て行くんですよ。いま此処には、第三者なんていないんですよ。この部屋の中には、あなたとわたしっきりなんですよ。^{おばさまア}愫嬢！ 仰言っ ^{あの方}て下さいよッ。あなたは、どうして彼のところへ行らっしゃらないのよッ?! どうして探しに行かないんです。

- 慥 (嘆息ひとつ) 探しに行つて、会えたらそれで、楽しいかしら?
- 瑞 (反問し) じゃあなたは、^{ここ}此家^{ここ}にいて、それで楽しいのか知ら?
- 慥 わたし、わたし——あの人^{あの人}の代りに——(ふと言ひ出しかねて、その儘やめてしまふ)
- 瑞 (促き^せこんで) 仰言^{おぼさまア}いよ。ねえ——慥^{おぼさまア} 姨! あなたが仰言^{おぼさまア}つたでしよう。——一度、わたしとゆっくりお話^{お話し}したい、——つて。
- 慥 わたし、わたしはね、——じゃ言^かうわ。(顔面^{かほ}が次第に美しく輝きはじめ、蒼白い頬に一抹の赤味がさす。はじめは言ひ^かがちだったものが、しまいにはすらすら潤達^{かほ}になり、衷心からの感動に、声までが稍^{あの人}ふるえを帯びる。) 彼^{あの人}が^{あの人}出^{あの人}て行^{あの人}つてしまつたから、わたしは彼^{あの人}に代^{あの人}つて、彼の^{あの人} 父^{おとうさん}のお世話を^{あの人}するの。彼の^{あの人} 子供を、彼^{あの人}に代^{あの人}つて面倒^{あの人}を見るの。彼の^{あの人} 好き^{じく}だつた書画^{あの人}もわたしが始末^{あの人}し、彼^{あの人}が可愛^{あの人}が^{あの人}つていた鳩^{あの人}を、わたし^{あの人}が飼^{あの人}つてやるの。彼^{あの人}が好き^{あの人}じゃなかつた人^{あの人}まで、わたしは全部、いたわ^{あの人}つて、好^{あの人}くしてあげ^{あの人}るのが本^{あの人}当^{あの人}だと思^{あの人}うのよ。それはねえ——
- 瑞 (口をはさみ、慥方^{あの方}を追いつめ詰問^{いつき}する。と、慥方^{あの方}のことばは一瞬とぎれるが、然し語気^{あの方}はそのまま) 何のため? ——
- 慥 (震えて) それは——彼^{あの方}が好き^{あの方}じゃなかつた人^{あの方}だつて、やっばり、彼の^{あの方} 身^{あの方}近^{あの方}に親^{あの方}しんだんですもの! (一氣^{あの方}に言^{あの方}ひ終^{あの方}えると、喜色^{あの方}が満面^{あの方}に充^{あの方}満^{あの方}する。この長^{あの方}い間^{あの方}心^{あの方}底^{あの方}に蔵^{あの方}いこみ、いま始^{あの方}めて口^{あの方}に出^{あの方}した情^{あの方}緒^{あの方}が、こんな信^{あの方}じ^{あの方}られ^{あの方}ないよ^{あの方}うなこ^{あの方}と^{あの方}だ^{あの方}つたこ^{あの方}と^{あの方}に、自^{あの方}身^{あの方}でさ^{あの方}えす^{あの方}つ^{あの方}かり驚^{あの方}いてしま^{あの方}う)
- 瑞 (息^{あの方}を吸^{あの方}いこみ⁽¹⁵⁹⁾) だからあなたは、^{アイン}靈^{アイン}のあ^{アイン}の母^{アイン}親^{アイン}、——わたし^{アイン}のあ^{アイン}の婆^{アイン}婆^{アイン}——さえも、命^{アイン}が^{アイン}け^{アイン}で面^{アイン}倒^{アイン}を見^{アイン}てや^{アイン}らう! ——つての?
- 慥 (苦笑^{あの方}して) あなたの^{あの方} 父^{おとうさん}が^{あの方}出^{あの方}て行^{あの方}つち^{あの方}や^{あの方}つて、彼女^{あの方}だ^{あの方}つて、と^{あの方}ても可愛^{あの方}そう^{あの方}じ^{あの方}や^{あの方}ないの?!
- 瑞 (笑顔^{あの方}ながらも、涙^{あの方}を流^{あの方}さん^{あの方}ば^{あの方}か^{あの方}り^{あの方}にな^{あの方}つて) ほん^{あの方}と^{あの方}うに^{あの方}慥^{あの方}姨^{あの方}!!

(159) 中国人のよくする動作のひとつ。日本ではこういう時、ハッと息をとめて「息をのみ」などとなるようである。

あなたってば!! あの人が以前、それに今だって、あんなにあなたに辛らく当たっているのを忘れてしまって――

懐 (哀し気に) どうしてそんな、面白くないことを、覚えていなくちゃならないの?! もしも^{あの方}彼のためなら、一人の人間のため^{ひと}だったら――、^{あの方}彼のためになるんだったなら――

瑞 (口を挟まずにいられなくなり) ああ、^{おばさま}私の懐姨!! そういう苦労を、どうしてあなたは、もっと大きな事のためになさらないんです?! あなたはどうして、ことごとに、^{おとうさん}彼のことが忘れられないんです?! 選りによって、あんなぐうたらに心を寄せるなんて!! あんな禄でなしの^{役立たず}に――

懐 (自身の胸を刺されるようで、哀願的に) そんな風に言わないで! あなたの^{おとうさま}爹を!

瑞 (弁解的に) ^{おじいさま}爺爺だってそう仰言ってたじゃありませんか!

懐 (切なくなり) そんな、そんな風に言わないでね。誰一人あの人を理解してあげたことがないんだから――ね。

瑞 (肩で一息ついて、痛ましげに) じゃあなたはそのまま、一生、^{あの人}彼に会わないおつもり?

懐 (突然、ゆっくりと項垂れてゆく)

瑞 (心をこめて) 仰言っ下さいよ! ^{おばさま}懐姨!!

懐 (聞えないほど小声で) ^{ええ}嗯。

瑞 じゃなぜ、^{はじめ}最初に、^{あの人}彼を出て行かせちゃったのよッ?

懐 (思い出しているらしく、同情の籠った口調で) わたし、わたし、^{あの方}彼が家にいて苦しんでいるのを見たら、見かねちゃったの。

瑞 (思わず反問して) じゃ、^{とうさん}彼が行っちゃって、あなたは楽しくなれたの?

懐 (小さく微かに) ^{ええ}嗯!

瑞 (嘆息して) 二人ともが、こんな風にして生きてゆくなんて、一体どうしてなのかしら?

懐 (もの佗びしげな、静かな顔にひとすじ、ほほえみの影がかすめ

る) 人家の^{ひと} 歡^{よろこ}ぶのを見るのは、あなただって、楽しい! と思わない?

瑞 (心掛りでならない様^{さま}で、ゆっくりと) あなたは家^{ここ}にいて、彼^{あのひと}のことを気^きにかけないでいられる?

慥 (項^{うなだ}垂れる)

瑞 彼^{あのひと}、他所^{よそ}に出ていて、あなたのことを思^{おも}わずにいられますか?

慥 (涙^{なみだ}が、静かに、蒼白^{そうはく}い頬^ほをつたって流^{なが}れる。)

瑞 生涯^{せいげい}、一生涯^{いちせいげい}、こんな風^{かぜ}に孤独^{こどく}に暮^くして行くの?!——二人^{ふたり}ともが、こんな風^{かぜ}に苦し^{くるしみ}んでおゆきになるの?!

慥 (瞳^{ひとみ}をこらして) 苦し^{くるしみ}い——苦し^{くるしみ}いかも知^しれない。でも、決^{けつ}して孤独^{こどく}じゃないわ。

瑞 (深く感動^{かんとく}して) 可愛^{おぼさま}そうな慥^さ媛^{まへ}!! わたしわかるわ。わかるわよ! わたしわかりますわ!! ただ——わたしが——心配^{しんぱい}するのはね、^{あのひと} 爹^{ちやう}は何時^{いつ}かきつと帰^{かえ}って来^こる!?——ってこと——。^{あのひと} 彼^かが帰^{かえ}って来^こっちゃったら、何もかもまた前^{まへ}とおんなじ。みんな、やっぱりじいとして、苦し^{くるしみ}んで、監視^{かんし}して、眺^{なが}めているだけ! 誰も、息^{いき}ひとつつ出来^{でき}ない。誰^{たれ}一人^{ひとり}——

慥 (ぶるっと、一つ身震^{みぶる}いして、急^{いそ}に、決然^{けつぜん}と首^{くび}をふり) いいえ、彼^{あのひと}絶対^{ぜったい}に帰^{かえ}っては来^こない!!

瑞 (譲^{やう}らず) けど、もし ^{あのひと} 彼^かが、——万^{まん}一^{いつ}——

慥 (軽^{かろ}く眼頭^{がんとう}の涙^{なみだ}の痕跡^{こんせき}を拭^{ぬぐ}い) ^{あのひと} 彼^か そうは出来^{でき}ないわ。死^しんだって帰^{かえ}って来^こないにきまってるわよ、(項^{うなだ}垂^たれてぬれたハンカチを見詰^{みづ}めながら、低^{ひそ}声^{こゑ}に、ゆるやかに) ^{あのひと} 彼^か、もう帰^{かえ}って来^こて、わたしに会^あったのよ!

瑞 (仰天^{おうえん}して) ^{おとうさん} 爹^{ちやう}、出^でていってからまたこっそり帰^{かえ}って来^こたんですか?

慥 嗯^{そうよ}!

瑞 (変^いだ! と考^{かんが}えはじめ) 何時^{いつ}?

慥 出^でて行^いった日^ひから二日^{ふたひ}目^め。

- 瑞 (思いもよらなかつた^{てい}体で、息をのみ) ああ。
- 愨 (同情的に) 気の毒そうにあのひと、一銭だって持ち合せてなかつたのよ。
- 瑞 (そんなことだろうという顔で) で、あなたは持つてるお金を、すっかりあげちゃったんでしょ。
- 愨 いいえ。わたし、手許にあったお金だけ全部あげたの。
- 瑞 (やや軽蔑気味に) ^{あのひと} 彼、受け取ったんですか？
- 愨 (穏やかに) わたしが受取らせたの。(思い出しつつ) ^{あの方} 彼、言つてたわ。一人前の人間にならなければ、死んでも帰つて来ない！
- 瑞 (感激のあまり、自制出来なくなり、話しつつける) ^{あのひと} 彼、^{父親} 爹にも^{こども} 子供にも済まない——つて言つてたわ。あなたのことまで、何度も言い出してね。あなた方の面倒を、わたしに見てほしい——つて言つてね。家のことも、^{じく} 書画や、^{あの方} 鳩のことも頼むのよ。 ^{あのひと} 彼、話し話し泣き出してしまつて、そして、その上また言つたのよ。一番心配でならないのは、——(早くから涙をぼろぼろこぼしているのに、笑い出してしまい) ^{ルイヂエヌ} 瑞貞！ ^{あのひと} 彼、まだ子、子供そっくり。どうしたつて、息子に嫁まである人みないには思えないわ。
- 瑞 (厳肅な様子になつて) じゃあなたは、これからは、^{あの方} 彼のためにこの家を^み 看守つてゆく決心をしていらっしゃるの？
- (以下の問答は、殆ど停滞することなく、一気に続けられる)
- 愨 (再び落ちつきを取り戻し) ^{そう} 噫！
- 瑞 (追いかけて) 一日じゅう、死にかけの^{おじいさん} 爺 爺に付き添つて?!
- 愨 (静かに點頭) ^{ええ} 噫！
- 瑞 (つめよるように彼女を見つめ) 死に水までとつて?!
- 愨 (瑞貞の視線をさけながら) ^{ええ} 噫！
- 瑞 (故意に次の様に質問して) その上、彼の子供の面倒までみてやつて?!
- 愨 (瑞貞を眺めて、微かに眉をひそめ) ^{ええ} 噫！
- 瑞 ここの家じゅうの、^{おおども} 大人・子供のお世話申し上げて?!

慥 (かたくなに) 嗯!

瑞 (ほとんど、腹を立てて) しかもその上、一日じゅう、わたしのあ
の^{しうとめ} 婆婆の顔色をうかがって?!

慥 (我知らず、小さな身震いをして) え、ええ。

瑞 (反対に激してしまい) 一生涯、外部へ出ないで??

慥 (再び、落ちつきを取り戻し) 嗯!

瑞 結婚もしないで?!

慥 嗯!

瑞 (押っ^{かぶ}被せて) 虐められて?!

慥 (小声に重く) 嗯!

瑞 (詰め寄って) 苦しみに苦しんで?!

慥 (凝視して) 嗯!

瑞 (邪慳に重々しく) 死ぬ——まで?!

慥 (項垂れ、手で額を揉みながら、ゆっくりと) 死ぬ——まで!

瑞 (爆発的に、痛恨しつつ) なんて、なんて、好い方、^{おばさまッ} 我的慥姨!!

でも、でも、それはいったい、何のためなんですよ??

慥 (顔をあげて) それは——。

瑞 (問い訊すように) 嗯、それはいったい——

慥 (困った様に) それは——、わたし——どう言えばいいかわからな
いけど——、(突然、非常に美しい笑顔になり) それは、そうする
ことがすなわち、生きて行くことなのですもの!

瑞 (つまってしまつて、やっと一言) あなたは、ほんとうに、^{おとうさん} 爹が、
帰って来ないと信じていらっしゃるの?

慥 (ほほえんで) 天が落ちて来る⁽¹⁶⁰⁾ ことがないと同じに—— ね! 帰っ
ては来ないわ!

瑞 あなたはほんとうに、曾家の門から、こんな牢獄から、離れないお

(160) この譬もよく使用される。天が落ちて来る^{たとえ} ことがあり得ますか——という。表
現法で、「絶対あり得ません」と言う代りとする。

つもりなの？ そんな一つの夢，そんな一つの理想，あんな一人の人間のために？——

慄 (悠々として) もしかすれば，わたしだって，何時かは，離れるかも知れないけど。

瑞 (迫いつめ，期待するように) 何時ですか？

慄 (笑いながら) それはね，天がほんとうに落ちて来て，啞までがショックで口をきいたら——だわ！

瑞 (限りもない憐みでいっぱいとなり) ^{スウイ}慄嬢！ 自身の^{たのしみ}快樂を，^{すつかり}全部，一人の人間の上に托してしまうことは，危険なことよ。——そしてまた，そうすべきでもないわ。(感慨をこめて) 以前は，わたし馬鹿だったけど——。^{おばさま}慄嬢！ あなたは今だに——

〔室内のものみな，次第に仄暗い暮色の裡に包まれてゆき，窓外^{ひさし}庇の上辺り，鴉が，二声啼いて飛び立つ。瑞貞の話してる間に，遠く城壁上，断続して送られる未だ帰営せぬ刺叭手の吹く角笛の音が，^{うらびれ}凄涼の空気のうちには侘びしくも漂い来て，ひきつづき，閉幕に至る。〕

慄 もう，言わないでよ！ ^{ルイヂエヌ}瑞貞！ (ふと，顔をもたげ，外を眺めやり) お聴きなさいよ！ あの，遠くで吹いているのはなあに？

瑞 ^{スウフアン}(彼女がこれ以上話したがらないのを見てとり) 城壁の上で吹いている^{ラツバ}角笛よ。

慄 (耳をすまして) とっても，侘びしい音ねえ！

瑞 (頷いて) ^{ええ}嗯！ 日が暮れちゃったわ！ 以前は，わたし一人お部屋にいと，ただもうあれを聞くのが嫌だったわ！ 聞いていると，もうまるで生きていることが味気なくなってしまうて！

慄 (瞳に涙が湧き上って来る) そうね。聞いていると，さびしすぎるわねえ！

(猛然，熱意をこめて瑞貞の手を握りしめ，小声に) けど^{ルイヂエヌ}瑞貞！ わたし今，急に，ほんとに楽しくなって来たわよ。(自身の胸を撫でさすりつつ) 胸の中がとっても温かくなって，——ね。まるで春

が来たみたいよ。(興奮して)生きてるってことは、こんな風のものじゃないのか知ら? わたし達が生きてるってことは、佷びしい!! けれどまた一面、蜜の様に甘い日々をずうっと続けて行く——ってことなんだわ!! (感激の涙を流して) 考えてみると、泣かないでいられない。よく考えると笑わずにはいられないわねえ!

瑞 (ハンカチを出して、^{スウフアン} 慄 嬢の涙を拭いてやり、たてつづけに、小声で力をこめて) ^{スウイ} 慄 嬢! あなたは、どうしてまた本当に、泣き出したりなさって!! ^{おばさま} 慄 嬢! あなたってば——

慄 (遙かに伝って来る角笛に耳をすまし) 構わないで頂戴!! 泣かせておいて下さいな! (涙の光る裡に、強いて^{にこやか} 温和に笑い出して) けど、わたしは笑っているのよ! ^{ルイ} 瑞——^{チエヌ} 貞—— (瑞貞はあまりの痛ましさに思わず俯向き、ハンカチで鼻先きを押える。慄方はまた笑いながら、瑞貞の顔をささえ、上げさせようとする) ^{ルイチエヌ} 瑞貞!! あなた、わたしの為なんかに、泣くことはないのよ! (暖かくおだやかに) たとい心の底じゃ辛くっても、わたしの涙は、確かに嬉しなきなのよ! —— (瑞貞は顔をあげて彼女をちらっと眺め、堪らなくなって、一層、しゃくり上げはじめる。慄嬢は瑞貞の手を撫で、悲喜こもごもの様子で、低い小声で慰めたり、訴えたりする) ——泣かないで頂戴よ、瑞貞! 幾年っていうもの、わたし、こんなにいろいろおしゃべりなどしたことなどなかったのよ。今日はわたし、まるで急に胸が晴れたみたい! ^{おひさま} 太陽に、照らされて、暖かくなったみたい! ^{ルイチエヌ} 瑞 貞! あなたはほんとうに好人だわ。あなたでなかったら、わたし、こんなに愉快になれなかったわ。あなたでなかったら、わたし、^{あのかた} 彼のこともなんか口に出せなかったわ。こんなにおしゃべりし、こんなに気持よく、お話など出来なかったのよ! (不意に一層興奮して) ^{ルイチエヌ} 瑞 貞! ^{よそ ほう} あなたが外部の方が愉快だと思うのなら、あなたはすぐ、出てお行きなさいよ。行っておしまいなさいよ。わたしは此家にいたって、同じように楽しいのよ。泣かないで、^{ルイ} 瑞 ^{チエヌ} 貞! ^{ここ} あなたは此家は牢獄だって言ったわね?! でも此家はそうじ

ゃないわ。そうじゃないわ——

瑞 (噀りあげながら) いいえ、いいえ、^{おばさま} 懐嫉! わたし、ほんとにあ
 なたがお気の毒なの! 心配で堪らないんです! そんなに喜んで
 おしまいにならない方が好いわ! あなたのお顔、また熱っぽくな
 ってるわ。心配なのは——

懐 (懇願するように) ^{ルイヂエヌ} 瑞 貞! 構わないで頂戴! わたし、はじめて、
 こんなにはしゃいでいるのよ! (瑞貞がバスケットを置いたテーブ
 ルに歩み寄り) ^{ルイヂエヌ} 瑞 貞! このベビー服は、やっぱり持って行って
 頂戴。(思いやり深く) ^{よそ} 他所へ行っても、やっぱり出来るだけ、人の
 ために尽くすようにして頂戴ね! 好い物は他人^{ひと}にあげて、悪いの
 を自分に残すようにして頂戴! 可愛そうな人は、どんな人だって、
 わたしたち助けなくちゃならないわ。わたしたちは、ただ食べるた
 めだけに生きてるんじゃないんですものね! (そのバスケットを開
 け) この小さい衣類は、あなたが必要なければ、着るもののない子
 供達に着せて上げて頂戴! (ふと、中から、純白の小さな毛糸のマ
 ントを引っ張り出して) このマント、可愛いでしょ?!

瑞 まあ、可愛い! ほんとに可愛いわ!

懐 (得意気に、もう一つ小さな、白い帽子を取り出し) これ、愛らし
 いでしょ?!

瑞 ^{ええ} 欸! ほんとに愛らしいこと!!

懐 (よろこんでしまって、また一枚、^{サテン} 黄絹子のベビー服を取り出し)
 これはどう?

瑞 (同じようにはしゃぎ出し、⁽¹⁶¹⁾ 思わず手をたたいて) とっても素敵だ
 わァ!

懐 (一段と彼女の顔が美しく柔和な輝きをみせる) ううん、これはた
 いして好くないのよ。もう一枚とっても——(自然に、にこにこし

(161) 前出。古くから、——老人でも、腹部の前あたりで一つ、ポンと手を叩いて表
 現する動作もふくめて、——「我が意を得たり」という感情を表現するため拍
 手をするのは中国人の日常生活中に少くない。

ながら、俯向いてバスケットの中をさしのぞく)

〔さびしい角笛の音は依然、途絶えもせず伝わって来る。この時、大客間への隔^{へだて}扇^{しきり}の扉が一枚、ゆっくりと推しあけられ、黄昏のうす明りの裡に、曾文清が出現する。彼はいちだんと蒼白く、痩せさらぼえ、着古した夾^{ダイヤバオ}袍⁽¹⁶²⁾をまとい、小脇に例の画軸^{じく}を抱え、疲れきった惨澹^{ふうてい}たる風体で、うなだれてよろめき出て来る。〕

〔慥方は、今や大はしやぎで彼に背をむけ、俯向いて、正に品物を取り出そうとしている。瑞貞は正面^{まとも}にその入口へむいている。〕

瑞 (一目みたきり、さながら悪夢にでもうなされている如く、大声をあげそうになるが声が出ない) あ、あ、あれ――

慥 (うれしさを^{おさ}抑えきれず、両手で金髪のピンクの紗の服を着た非常に美しい、見事な西洋人形をさしあげ、満面^{えみ}に笑を湛えて、瑞貞の方を、期待にはずんで眺める。) 御覧なさいよ!! (ふと瑞貞の蒼白に緊張しきった顔を眺め、身震いして) 誰?

瑞 (ふぬけの様にぼうーとなり) 見、見たわ、て、天が、天が落ちて来たの! (くるりと振り向くや、顔を^{おお}覆ってしまふ)

慥 (振り返って文清を認める。文清は歩みをとめ、はっきりと見えないうように彼女たちの方を眺めすかす) あッ!

〔とたんに文清、首うなだれ、黙々と自室へ入ってゆく。〕

〔彼が入ってしまったところへ、思懿が書斎の小門から馳けこんで来る。〕

思 (驚喜して) 文清が帰って来たの?

慥 (かすれ声で) 帰って来ました!

〔思懿、すぐ自室に馳け入る。〕

〔慥方はぼんやり気抜けして、その場に立ちつくす。〕

〔遠く遙かに角笛の音、風のまにまに、空中に、侘しくも震え続ける。〕

(162) 前出。袷の長い旧中国服。

(幕、静かにおりる。おりるとすぐ、次の第二場は、相当の時間を経過した後であることを表示する。)

第 二 場

第一場をへだてること十時間の光景。黎明前の最も暗黒の一時^{いつとき}。蕊をいっばいにひねったランプがあかあかと室内を照らしている。例の金魚の破れ皿は何処に捨てたのか鳩籠だけがぼつりと一つ卓子上^{テーブル}に寂しく置かれ、中の白鳩は身じろぎもせず、頭を自身の翼につっこんで、ぐっすり睡りこんでいる様子である。部屋の空気は完全に冷えこみ、この夜更^{よふけ}、腰掛けていには、うんと厚い着物でなければ、晩秋も冬近い寒気は堪えがたい。折から戸外には西風が吹きつ^{ゴアラ}のり、庭の白楊樹は一しきり一しきりと時雨そのままに音をたて、人々に寂しくも切ない情感を^{おもい} ^{おさ} 圧え難くさせる。破れた窓紙も風^{あお}に煽られて、小やみなく震えている。たまたま、遠く更告げる鐘^{とき}の音が流れ、西風の雄たけびのなかに、時折、遠く深い巷の辺り、「硬面^{インミエヌ} 饅頭」の老人の呼び売りの声が一瞬強くなり、また忽ち弱まるその風につれて、時にはっきりと、折ふしは微かに、漂よい流れて来る。

この一夜、曾家の人々は殆ど皆、床についていなかった。曾家の歴史の中で最も悲惨な一夜ではあった。曾老太爺は^{曾のご隠居} ^{よつひて} 徹宵 験も合わず、あの塗り上げまた塗り上げ、幾年となく、朝夕馴れ親しんで来た立派な棺材を、あと数時間とたたぬうちにただ手を^{こまぬ} 拱いて人手に渡さなくてはならないと想えば、胸の中は真に我が身を^{あぶ} 火炙りにされるより辛いのであった。

杜家では「寅の刻」の終えぬ内——即ち五時以前——に「お棺迎え」をして⁽¹⁶³⁾ ^{めでた} 杜府へお棺材を運びこむ手筈を^き 定めていた。だから杜家の差配は、五時までは待つことを承知はしたものの、江泰は昨夕五時、金策に飛び出し

(163) 第一景の注 154 でも触れたように、旧時代、貴族や大官の邸宅を言った。王府などはその代表で親王邸である。清朝末頃から大公使邸をも言うようになり、それらから転じて、大きな金力・権力を持つ者の邸宅をも公式ではないが、その様に呼び、一般的な日常挨拶語として、「お宅」を「府上」と呼ぶことになった。「公館」は「府」より新しいことばである。

たまま、いまだに帰らない。曾文彩は夫の行方を案じつつ、一方また、
ジャンファン(164)
 上房へ父親を慰めに行かねばならなかった。一晩中、時折出て来ては、
 一再ならず、あちこち電話をかけ、人を探しにやったりしたが、依然とし
 て江泰の足どりは沓として不明。他の者たちも老太爺ごいんきよがこれほど焦慮する
 のを眺めては、付き添っているにもいられぬ思いでいる。勿論、心の底か
 ら江泰がうまく金を借りて来て、この狼の様な杜家の差配どもを追っ払っ
 てくれるよう願っている者もあるが、中にはほんの口先で孝行振ったこと
 を言うばかり、内心では反対に、江泰が万一、金でも借りて帰り、自身の思
 惑がぶちこわされるのを怖れている者もあった。同時にこの夜、また曾家
 の或る者は秘かに自室で、自分の荷物をまとめるのに忙がしく、涙を流し
 ながらも愉悦よろこびを抱き、過去を追憶しては哀惜おもいの想念を、未来を憧憬しては
 光明の希望を抱いているが、これこそはまだ明日の北京人に属すべきもの
 であり、「棺」のうちにころがり悶える人間共とは、関係のないものなの
 である。

この悲痛な寂寞と寒気のたちこめる一間の裡うちには、文清が呆ほうけてしまっ
 た様に、ソファーに腰を下したまま身じろぎひとつしない。濃いグレーの
 杭州縐子の、古い棉ミエヌバオ(165)袍(166)に着換え、両手は両袖の中に入れたまま、声も立
 てない。倦怠と絶望の影は代る代る、瞳から眉宇へ、そして口元へと移っ
 てゆき、終にはただ悩まし気に、遠くと*の更告げる銅鑼ねの音や風の音、そし
 て木々の葉のざわめきに耳を傾け、時に折ふし、何時終るとも知れぬ傍ら
 の思懿の長口舌に、ふと心を留めたりしている。

思懿は藍色マオゴ(167)の毛葛ミエヌバオの薄い綿しやべ袍(166)に着換え、今迄に一体どれほど饒舌りま
 くったのか、今はもう話し疲れた如く、文清の答を期待し彼を眺めている。
 片手に薬の入った碗を、片手からに空の碗を持って、その二つの碗に交互に薬

(164) 前出。仮に日本で考えれば母屋にあたる場所。

(165) 前出。綿入れ長着。

(166) 旧中国人が冬季よくしていたかたち。両袖口の中へ相互に手首までをつっこむ。
 非常に暖かく、ぼんやり時を過ごすに適した姿勢。

(167) セル、サージに似た毛織物。

を移し換えてはさまし、その熱い薬がさめて飲み頃になったと見ると、一気に飲みほし、直ぐまた別の水の入れてある碗をとりあげて口を漱ぐ。^{すす(168)}

思 (碗を下に置き、又もや、開始する)でも好かったわ。あなたもまあ帰って来たということだね。これでわたしも曾家の人達に申し訳が立つというものだわ。(冷たく笑い) ^{ツアイさん} 姑奶奶の言っていたように、わたしが、^あ ^な ^た あの人の兄上を追い出して帰って来させない——なんてことにならずにすむんですもの。

〔文清、聞きあきたように顔を上げ、彼女をちょっと眺める。〕

思 (横眼で文清を見ながら、やや真面目な様子で) どうなの、この一件? わたしはそんな風に話を定めておいたんだけど? (解せぬと ^げ いった面持で) おや、あなた、どうして何とも仰言らないの? でもこれはわたし、決して、あなたに無理に——って言ってるんじゃないのよ!

文 (嘆息し、^{やるせ} 遺瀨なげに) 君、君は結局、それでまた、どうしようというのだね?

思 (眼を見張り、またもや、「無実の罪」でも着せられた——という素振で) 変だわねえ。あなたの御気に召す様にしても、だめなのね。(「横車を推しきる」という気配で) わたしはね、やるとなったら、とことんまでやるわよ! 今日うちの ^{文彩さん} 姑奶奶ときたら、お父さんや、わたしの子供たちの目の前で、わたしにくって掛かっただけど、今

(168) 昔から中国では食卓では茶を飲まなかった。食事が終ると、すぐ脇テーブルにぬるま湯や水をいれて用意してある湯呑をとって口を漱ぐ。茶をのみたい場合は、その後のさっぱりとなった爽々しい口で、(招待客などの場合は、多く別室または別席で) 茶の味を賞味するということになる。その習慣が、こういう時にも、自然に出て来ることになって、たくまずして巧みにこの階級の生活習慣を描出している。ちなみに、解放前まで、中国労働者階級にとって茶は、たとい都会でも、日本の現代のように「日常茶飯事」的にたやすく口にはいるものではなかった。経済的原因を第一として、すべてに茶を飲むほどの余裕すらなかったからである。一口に労働者階級ということばで話されているが両者の実態はそれほど異っていたことが、日中両国人から従来気付かれていなかった。

のところ、わたしはみんなあなたのために我慢しているのよ！ たった今も、あの人のところへ行って、わたしの方から下手^{したて}に出て話をし、こちらへ来て貰って、皆で集って一緒に相談しましょう——って頼んで来たんですよ。

文 （我慢しきれず、顔をあげ）何を相談するんだ？

思 オヤ?! わたし達の話してるこのことを相談するんですよ。（文清の気持を見ぬいたと自認して、皮肉に）これはね、子供が飴を見て、内心ほしくせに、口先で要らないって言うのとはわけが違いわよ。わたしって人間はね、心にほしいと思ったら、ズバリ、ほしい！ って、言うのが好きなのよ。羊の肉は食べたいが、香^{におい}がいやだ！ ——なあって男、わたし、大嫌いだわ。

文 （うるさくなり）もう夜があけるよ。君、寝に行き給え！

思 （聞えぬ振りで、自分の言い分を喋り続ける）わたし、たった今ざっくばらんに^{文彩さん}姑奶奶に話して来たわ。——

文 （驚き）あ！ 君^{文彩}ィ、妹妹にまで言っちゃったの？

思 （おちょぼ口⁽¹⁶⁹⁾をしてみせ）どうして？ これ話しちゃいけないの？

〔文彩、書斎の小門から登場。前景と同じ駱駝の袍子^{パオズ}を着、上に一枚コーヒ色^{パオズ}の毛糸のカーディガンを重ねただけ。一晩中眠らなかつたので、一段と憔悴してみえ、頭髪も僅に乱れている。〕

彩 （ほつれ毛をかき上げつつ）どうしたの、^{お兄さま}哥哥！ もうじき五時よ。まだお休みにならないの？

文 （苦笑し）いや。

彩 （思懿の方へ向き、あせっている様子で）江泰が帰ったんでしょうか？

思 まだよ。

(169) してやった！ などというちょっと得意だったり、小意地わるかったり、いたずらっぽかったりする感じを表わす時などによくする。口を小さくつぼめて見せる。ひどく前方へとがらせることはない。

- 彩 たった今、表の方で門の^{かんぬき} 闕をあける音がきこえたみたいだけど。
- 思 (冷たく) あれは杜家のよこしたお棺^{トウ}かつぎ達が、お棺^{めでた}を担ぎ出しに来たのだわ!
- 彩 あ、そう!(次第に失望から来る寒さに襲われて身震いを一つすると、うずくまる様に例の古ソファーに腰を下す) おーお、寒いったら!
- 思 (聴き耳をたて、意地悪な気持が圧えられず故意に) ほーらね!
今また鍵をかけているわよ!(先刻の問題を持ち出し) どうでしょうね? (呼びかけ方はいくらかぎこちないが、満面に笑をたたえて) 妹^{ツアイちゃん(170)} 妹! さっきわたしが話したあのことね——
- 彩 (心が麻の如く乱れているため、ぼんやりと) 何のこと?
- 思 (媚びるように笑い、ちらりと、文清に流し眼をくれ) 懐^{スウさん}小姐をお嫁に貰っちゃう——ってことを言ってるんじゃないですか!
- 彩 (思い出したのはものの、思懿が腹では又どんな事を企んでいるか分らぬのでちょっと苦笑して) それはどうかと思うわ。
- 思 (ずばりと言っただけ) どうして、どうかと思う——っていうことになるのよ!(いかにも親しそうに) 妹妹! あなたね、ほんとうにこのわたしの心が、こんなに(小指をあげて示し)『針^{針のめ}穴ほどもない』みたいになっちゃだなんて思わないで頂戴よ! わたしゃ、絶対に、そんな一日じゅう夫^{オトコ}を守って、それで漸く日暮しをしているような女じゃないんですからね。「賢夫人」なんてことあ、今生^{こんじょう}でのわたしには及びもつかないだろうけれど、それッ位の度量だっ

(170) 前にも触れてあるが、中国の呼称は日本の習慣からみて複雑でむづかしい。日本では、例えば懐^{スウさん}方のことをスウさんと呼ぶということになれば、その家内の全員がその呼び方でよい。が、中国では、原則として、呼び手とその対象の血縁関係が或る程度まではっきりしてしまうよび方を、それぞれがすることになる。文彩が懐^{スウさん}表妹と呼んでいるが表^{スウさん}がつけばいとこであることがそれをきく第三者にもはっきりするし、妹^{ツアイちゃん}とつくので年下であることも解るということになる。こういう原則を踏まえて、もっと親しい自身の感情を、特に表現したい場合には、表^{スウさん}妹^{ツアイちゃん}のかわりに妹^{ツアイちゃん}などをつけるということもある。

たらわたしだって持ち合わせてるわよ。(再び謙虚になって) 言ってみれば、こんなことは、何も度量があるとかないとかいうようなことじゃあないんですものね。従兄妹同志が結婚して、親戚がいっそう親しくなるんだもの、誰はばかることもなし、どこにだってざらにあることだわよ。

彩 (おとなしく、まじめに) いいえね、わたしの言ってるのは、^{スウき} 慥表妹の意向も訊いてみなくちゃならない——って言ってるんですよ。

思 (皮肉な笑い声を立て) おやまあ。ま—だ訊いて見なくちゃならない——ですって?^{あのひと} 彼女に何の不足があるものですか。わたしときたら全く馬鹿正直だものでね。はっきり^{もの} 話を言うことが大好きなのよ。^{スウちやん} 慥表妹のあの気持なんて、わたし一人が気付いているだけじゃないわよ。^{スウちやん} 表妹ときたらねえ、至れり尽せりの立派な人だわ。わたしは、心にもないことをいうのは、^{まつびら} 真平! ——でねえ、(文清に向い、親切を極めるといふ素振で) 「表^{お義兄さま} 哥」! こうなったら、あなたも正直に仰言しゃらなくちゃねえ。^{しんみ 小じうとさん} 親身の姑奶奶もこの場にいて下さるんだし、あなただって、^{妹さん} 妹妹の眼の前だけ位は、わたしに対してははっきりした話をなさらなくちゃあね。

文 (ちらと文彩を眺め、また項垂れて無言。)^{うただ}

思 (追求して) あなたがはっきり仰言りさえすれば、わたしうまく取りはからってあげられるのにねえ!

彩 (兄の気持を汲んだらしく、彼をかばって) わたし、矢張りあまりいいようには思えないんですけど。

思 (ギョロリと眼玉を動かして) どうしてなんですよ? ^{ツアイさん} 妹妹! あなた安心しててよ! わたし絶対に^{スーさん} 慥表妹を虐めたりなどしませんからね。前よりも仲好くこそすれ、今迄より虐待なんてこと、するもんですか! (ますます自分が気の好い人間であるようにみせ) わたしという人間はすごくさっぱりしててね。夜中だというのに、わたしが昔、曾家へ持って^き 嫁た首飾^{ペンダント}なんか大探ししたのよ。都合よく、引っ掻き廻しはじめたとたん一番いい珠が見つかったわ。

わたし、これを文清のために、^{スーさん} 懺表妹との結納品にしようと思うの。
 (言いながら小卓から一對の、^{かんざし} 古い簪 からはずした珠を取り上げて、^{文彩さん} 文彩の眼前へ差し出し) 妹妹、これどう？

彩 (仕方なく、受け取って見、お座なりにほめる) 悪かぁないわね。
 思 (次第にはしゃぎ出し) わたしとても性急でね、^{せつかつ} 新 ^{シンフアン(171)} 房までもう考えといてあげたわよ。もう直ぐ^{ユアヌさん} 袁 ^た 家の連中が汽車で出発ちまうでしょ。そしたらさ、^あ 部屋が空くから、——わたしがね、すぐ^{建具屋さん} 裱糊匠を呼んで大至急、張り替えさせるわ。みんなでバタバタ手伝って貰えれば、二三日もたたぬ内に、^{スウさん} 妹妹も三々九度の御祝い酒がのめるわ。わたしはね、もう何もかも考えといたのよ——(文清を見、嘲弄しているのかほめてるのかわからない態度で) うちの文清と来たら、^{かだて} 飛びっ切り^{大事のスウちゃん} 氣質が好いでね。彼の懺表妹の迷惑にならないかと、そればかり案じているのよ。わたしもう、とっくに、考えをきめてあるのよ。これからはね、(ままよと、ズバリ言っのける) えーと、ちょっと耳障りな言い方だけど、^{リヤントウタア(172)} 両頭大ですよ。
 (下卑た高笑いをし) わたし達どっちも虐めっこなしよ!!

彩 (内心、小うるさくなりながら、仕方なく二度ほどあいそ笑いをし
 て) そうね。でもわたし、やっぱり、^{おとうさま} 爹 の御意見も伺ってみなく
 てはいけないと思うんですけど。

- (171) ^{フアン} 房 は房子で建て物。旧時北京あたりでは一つの建物——^{むね} 棟は普通三間、大きくて四間に仕切られていた。その新婚のための房子を新房という。但しこの場合は、当時の多くの庶民のようにその^{一部屋} 一部屋を用意しているのかも知れない。
- (172) 例えば、太郎夫婦には^{あとつぎ} 子供がなく、次郎夫婦に一人だけ^{あとつぎ} 男児がある。太郎と次郎が相談の上、その男児に二人の嫁を貰う。嫁の一人のA子は太郎家において、別の一人、B子は次郎家に在る。普通一人の男性に二人の妻の場合は、一人は正妻、他の一人は^{めかけ} 姨太太であり、例えば年越しの^{コウトウ} 叩頭などの正式の儀式的場では、他の一人は正妻に対して叩頭の礼をとらねばならない。が、この太郎家の嫁A子、次郎家の嫁B子は共に^{れつき} 歴とした正妻であった。こういう在り方を「^{リヤントウタア} 両頭大」と称した。旧来、日中両国は同じように「封建制」を云々し同じように、家系を重んずる——などということばで言われて来たが、その「封建性」の実態は程度？ に於てこれほど大きなちがいがあったのである。

〔張順、書齋の小門から登場。今、起こされたばかりらしくねぼけ
 眼まなこで着物もまだきちんと着ていない。〕

張 (入口をはいるより早く) 大奶奶大奥さま!

思 (張順にはとりあわず、文彩の話がよく聞えなかったふりをして)
 ええ?

彩 わたし 爹おとうさま に伺ってみなくてはならないでしょう、——って言
 ましたの。

思 (更に自信あり気に) まあ、こんなことを 爹おとうさま にきく必要がある
 んですって? こんな好い嫁を貰っておけば (詞ことばの裏に別の意味を
 含ませて) あの年寄りに付き添って世話をやくにしても、今までよ
 りは「名目が立つ」し「世間体もいい」じゃありませんか? (不意
 に) けど、そのう——一つだけね、家の中じゃどうにでも、呼びたい
 ようにあの女ひとを呼んでいいけど、表向きには、矢張りあの「懐小スウジイヤオ
 姐デイエ」が好いわ。奶奶おばあさまだの太太おととだのという呼び方で他人様から笑わ
 れないようにしなくちゃね。—— (又もやひょいと話の角度を変え
 て、文清を一瞥) けど、実際のところ、わたしはどうでもいいのよ。
 これだって文清の意向いこうよ。文清の、意向なのよ。(文清が口を開こ
 うとしたとたん、張順の方を振りむき) 張順! 何なの?

張 老 太 爺ごいんきよさま おくさまがあなたをお呼びでございます。

思 老 太 爺ごいんきよまだ寝てないの?

張 欸!ハイ——

思 (張むかに 対い) 行きましょ。あーあ!

〔思懿せかせかと書齋の小門から退場。後に張順がつづく。〕

彩 (思懿の出て行くのを見送り、ほっと立ち上り、文清の前へゆき、
 同情しきった口調で、ゆっくりと) 哥哥お兄さま! あなた未だ何も召し上
 ってないんでしょ?

文 (彼女を見、首を振り、再び気ぬけしたように放心に陥ち入る)

彩 わたし、棗ズアオニス(173)泥酥を少し持って来て差し上げるわ。

(173) 棗をすって作った菓子。

文 (慌てて手を振り、うるさそうに) いや、いらん、いらん。(そして
け
気だるげに) 僕、とても食べられないんだ。

彩 じゃ^{お兄様}哥哥，わたしの部屋に行ってちょっと顔を洗ってひと眠りな
さ
ったら！

文 (腑の抜けたように) ううん^{ねむ}睡くないんだ。

彩 (訊^{たず}ねかねていたが、思いきって) お、彼^{お義姉さま}女はどうして今日一晩
中あなたをお^{お兄さま}部屋に入れ^いないの？

文 (みじめに笑って) 哼！^{フン} 彼女^{あいつ}、僕に^{あやま}謝罪れっていうんだよ。

彩 で、^{おにいさま}哥哥は？

文 (絶望^{てい}の体、然^{てい}しました、かたい決意の顔色で) 無論、^{あやま}謝罪るもんか
！(直ぐ眼を閉じる)

彩 (心から同情し、手^{ほどこ}の施しようもないという口調で) まあ、どこ
に^{いつたい}一体そんなことがあるんです?! 夫^{旦那さま}がたった今帰って来て二
分と^た経たない内から、くどくどこんなにのべつ幕無しにしつっこく
――

〔屋外には西風がひょうひょうと吹き、陳奶媽、書齋の小門より登場。彼女の顔色は此の一夜の気苦勞のため目立って蒼白となり、眼
まで幾分、落ち窪んでいる。大きい綿^{ミエン・フオ(174)}襖をはおりながら、あくび
をしつつ登場。〕

陳 (文清が項垂れ眼を閉じ、凭れているのを見て、眠っているものと
思いこみ、文彩^{むか}に対し声を落して) どうしたんですの、清^{おぼつちやま}少爺!
^{ねむ}睡っちゃったんですか？

彩 (小声で) そんな筈はないでしょ！

陳 (文清に近寄る。文清、依然として眼を閉じたまま、口を開こうと
もしない。陳は^{ツエヌチン} 彼を眺め、憐れむように首を揺り、さも可愛く
てならないというように、文彩の方を振り返り、声^おを押し殺して)
多分は、睡^おっちゃってるんでしょ。(軽い嘆声を洩らすと、身に纏っ
ていた綿襖^{ツエヌチン}を 彼^{からだ}の 軀にかけてやる)

(174) 綿入れの上着で外部に着る着物。

彩 (小声で慌てて) お止し、お止しなさいよ。あなたが風邪をひくわよ。わたしがとって来るから (自分の寝室へ向う)

陳 (手で文彩を押し止め、声をこらして、急いで) わたしは構わないんです。いいんですよ。姑小姐、あなたは矢張り、上屋へ行って老爺子をみて上げて下さいよ！

彩 (いらだって) どうしてなの？

陳 (心を痛めている様で) 横におさせしようとしても、ちっともお背きにならないで、ただお部屋の中で座ってみたり立ったり、立ったかと思うと、又すぐ座っては、江旦那さま、姑老爺は帰って来たか来たか、って訊きどおしなんですよ。

彩 (途方にくれて) 一体どうすればいいんでしょう？ どうしましょう？ 江泰ったら一晩中——今だに影も形もなくなっちゃって、どこへ行ったのか、行き先も解らなくて——

陳 (首を振り) ほんとにまあ、罪なことをなさって！ (彼が目を醒まさないように、文彩を比較的離れた所へ引っ張ってゆき) 言ってみれば全くお気の毒ですよ！ お屋間はお棺をやってしまうと言ったものの、さてこう夜中になって、何十年もの間、手塩にかけて来たものをむざむざ人手に渡すのかと思ったら——ねえ。あの方とてもじっとしては居られませんよ。やきもきしないではねえ。

〔張順、書齋の小門から登場。〕

張 姑奶奶！

陳 (急いで、睡っているらしい文清を指さし、続けざまに手を振る)

張 (とたんに声をおとし) 老太爺が御呼びで。

彩 そう！ (二三歩、歩いて振り返り) 慥小姐は？

陳 たった今、老太爺の御み足を叩くのを、およしになったところで——多分、お部屋で何か片付け物を、していらっしゃいますよ！

彩 そう。

〔文彩、張順の後について、書齋の戸口から退場。〕

〔戸外の風声、心もち弱まり、院子には樹々の落葉が、風に転げ廻

っては、サラサラの音をたてる。更^{とき}告げる銅鑼の音は、次第に遠ざかり遠ざかりしてやがて聞えなくなってしまう。巷の遙かに、再び「硬^{イン}麵^{ミエヌ}餠^{ポー}餠^{ポー}」売りの、老い寂びれて重く一途^{いちず}な呼び声が伝わって来る。]

[陳奶媽は欠伸^{あくび}をすると、文清の身邊に歩み寄る。]

陳 (文清を覗き込み、依然眼をとじているのを見、思わず微かな声に出して、心からいとおしそうに) かわいそうな清少爺!

[文清、眼をあける。依然たる絶望と倦怠の瞳の色、両手で軀^{からだ}を起こす——]

陳 (驚いて) 清少爺! 眼がさめましたか?

文 (憂鬱な昏迷の中から、喚^よび醒まされたにも似て、次第次第に顔をあげ) あ、君かあ?! 奶媽!

陳 (文清を眺め、思わず眼頭を押え) わたしですよ、わたしの清少爺!
(首を振りながら、彼を眺め、いたまし気に) おかわいそうに、ほんとにすっかり瘦せちゃって! あなたはどうしてこんな所で寝てるんです?

文 (うやむやに) 嗯! 奶媽!

陳 ねえ、わたしの清少爺! この頃うち、世間ではとっても苦労なされたんでしょね! 慄^{スウ}小姐がね。一日だって、わたしにあなたのことが心配だっておっしゃらなかった日はなかったんですよ。お気の毒^{スウシイヤオヂイエ}に慄^{スウ}小姐はねえ——

文 (突然、奶媽の手を掴み) 僕の奶媽!

陳 (切なさに堪えられず) わたしの清少爺! わたしの肉の、わたしのおぼつちやまア^{おぼつちやまア}の清少爺!! 帰っていらしてもまだ、慄^{スウ}小姐にお会いになってないんでしょ?

文 (口がきけなくて、只しっかりと、陳奶媽のひからびた手を握るばかり) 奶媽! 奶媽!

陳 (彼の心底を思いやって、いじらしくてならぬ風に) わたしもう彼女^{おじようさま}をお呼びしておいてあげましたよ。

文 (愕然とし、すごく興奮して) だめッ! 駄目だよ、奶媽!

陳 因果なことですよ! わたしの清少爺! ^{おぼつちやまア} こんなあなたが、もうすぐ孫を抱く様な人だなんて、どうして思えるでしょうね。清少爺!

文 (慌てふためき) だめ、だめッ。^{スツさん} 彼女を呼ばないでッ! 君ィ、何だって――

陳 (書齋の小門の開くのを見て) そんな、そんな、あ、きっと彼女が来たんですよ!

[慄方、書齋より登場。]

[彼女は黒いラクダの旗袍に^{テイバオ}着換え、非常に長い黒髪を垂らし、蒼白な顔、冷静な表情ではあるが、大きな眼の^{うち}裡には微かに悩みと疲労の気配が浮んでいて、美しい幽霊のように音もなく部屋に歩み入る。]

[文清はこの時、すっかり興奮して立ち上がる。]

慄 陳 奶媽!

陳 (故意に何気ない様子を装い) ^{スツシイキオヂイニ} 慄 小姐! ^ト まだお眠りにはならなかったんですか?

慄 ^{ええ} 噫。(適当な言葉が思いつけず) わたし、わたし、鳩を見に来たのよ。(すぐ鳩籠を置いたテーブルへ近づく)

陳 (ぼつを合せ) そうですか! さあ御覧なさいませよ。(不意に思いついて) わたしも、^{わいぼつちやん} 孫少爺や^{わいおくさま} 孫少奶奶が起きられたかどうか、^{大奥さま} 見て参りませよ。^{ユアヌ} 大奶奶があのお二人に袁さん方をお見送りさせなさるんですって。(言いつつ、戸外に向って歩き出す)

文 (彼女の^{ミエヌアオ}棉襖を取り上げ、極く低い声で) 君の^{わたわれ}棉襖だ。^{ばあや} 奶媽!

陳 あ、そうそう、^{ミエヌアオ} 棉襖! (二人に笑いかけて) まああなた方、見て下さいませよ。わたしのこの忘れっぽさを!

[陳、棉襖を持ち、それにかこつけて出かけて行く。]

[夜明け前、風また次第に吹きつのも、^{ボアラ} 白楊樹また、驟雨さながらの響をたてる。遠くには早くも、風の音につれて、空中に漂い舞う一番鶏の音が聞える。]

〔二人、黙然と相い対して暫くは声も無い。文清、慚愧にかられ首うなだれて、ゆっくり寢室へ向って歩く。〕

慚 (ようやく、視線を鳩籠から移して) 文^{ウエヌチン} 清!

文 (足を止める。が、依然振り返ることが出来ない。)

慚 ^{ばあや} 奶媽が、あなたが探していらっしゃるって——

文 (ふり返り、静かに顔をあげ、慚方を眺める)

慚 (再び項^{うなだ}垂れゆく)

文 ^{スツフアン} 慚 方!

慚 (我にもなく再び苦し気に籠の中の鳩に見入る)

文 (言うべき言葉もなく、寂しそうに) この、この鳩、まだ家^{うち}にいたの——ね。

慚 (頷き、沈痛に) ^{ええ} 嗯! もう飛べなくなってしまうてるんですの!

文 (うっかりと) 僕—— (不意に悟って、顔を覆って^{むせ}噎び泣く)

慚 (声を震わせ) そんな、そんなに——

文 (依然、哀泣しつづける)

慚 (前へ一步ほど近づき、半ば慰め、半ば途方にくれた口調で) そんな、そんな風になさらないで!! どうしてお泣きになるの? ねェ!

文 (ソファ^みに軀を投げて慟哭する) 僕、なぜ帰って来たのだァ! どうして帰って来ちまったんだ! 絶対に帰って来ちゃならないことをよーく解っているのに——僕は——どうして——またァ帰って来ちまったんだァ!

慚 (傷心にあわれみ深く) 飛べなければ帰っていらっしゃいよ!

文 (噎び泣きつつ訴える) 君には、君には——わからないんだ。世間の、——世間の^{なみかぜ}波風が——

慚 ^{ウエヌチン} 文 清! あなたの—— (鍵の束を取り出し、文清に渡す)

文 あ?!

慚 これ、あの箱の鍵ですの!

文 (解せないで) どうして?

慚 (冷静に) あなたの書軸^{じく}は、みんな、あの箱に入れてありますの。

(静かに、その鍵をテーブルの上に置こうとする)

文 (驚いて) 君どうしようっていうの? 慄方^{スウフアン}——

[間。戸外に風の音、樹々の葉の音。]

慄 ほら、聴いて御覧なさいよ!

文 あー!

慄 戸外の風、ひどく吹いてますわ!

[風声の裡に戸外で誰かが「慄姨! 慄姨!」と呼んでいるようである。]

慄 (耳をすまし) 誰かが、外でわたしを呼んでいますわ?

文 (同じく耳をすますが聞えない) だ、誰も呼んじゃいないよ?

慄 (肯定し、沈んで悲し気に) いますわ、呼んでますわ!

[思懿^{スウイイ}、書齋の小門から登場。]

思 (慄方に当てこすっているようでもあり、何気ない話でもあるようで)

ああ! わたし、てっきりあなたは此処^{ここ}にいると思ったわよ!(なれなれし気に) 慄表妹^{スウオヤン}! わたし、また腰が痛くなって来たわよ。

後で、もう一度、叩いて頂戴ね。いいこと?! あ、そうそう。さっき、わたしまた言うのを忘れてたわ、表哥^{お義兄さん}が帰って来てね、あなたにまた一つ、好い物を持って来たのよ。

文 (困りきって) 君ィ——

思 (有無を言わせず、例の卓上の一對の珠をとり上げ、慄方の前へ差し出し) 御覧なさいよ。この珠、すごく大きいでしょ。なんてよく出来てるでしょ! ねェ!

文 (やめさせようと) 思懿^{スウイイ}!

[張順、書齋の小門から登場。入口で主人達の話の最中なのを見、足を止める。]

思 (同時に——文清の顔色など気にもとめず、笑いながら) 表哥^{お従兄さん}がね、これを、表哥^{おにいさん}から表妹^{あんた}へ差し上げるんですって——

文 (怒りに顫えていたが、突然爆発させ、憤然として) 君って人ほどこまであくどいんだ!

〔文清、言い終るや否や、自身の寢室へ馳け込む。〕

思 ^{あなた}文清！

〔寢室の扉、ボタンとしまる。〕

思 (ふくれ面^{つら}で 冷然と) あー、あー、実際わたしゃ、もう主婦として、どう取りはからったら好いものやら！

張 (この時、進み出て低声に) 大奶奶^{大奥さま}！ 杜^{トウさん}家^{ところ}の差配が、もう寅の刻も過ぎてしまいますので、どうあってもたった今、お棺を担ぎ出す——なんて申しておりますんですが——

思 いいわ。わたしがすぐ行くからね。

〔張順、大客間への隔扇^{とぐち}から退出。〕

思 (突然) 好いわ。慄表妹^{スウさん}！ わたし達、またあとでお話しましょうよ。(書齋の小門に向かい、二三步、歩いて、又むき直り、いかにも親し気に笑いながら) 慄表妹^{スウさん}！ わたしどうもねえ、胃がまた悪くなりそうなのよ。あなた、台所へ行って、お塩を一握りほど煎って来てよ！ ね、いいこと?!

慄 ^{うなだ}(項垂れる)

〔思懿、書齋の小門から退場。〕

慄 (ぼんやりその場に立ちつくし、鳩籠に見入る。)

〔戸外に風声。〕

〔瑞貞、大客間への隔扇^{ゴーンヤス}から登場。〕

瑞 ^{スウおばさま}慄 姨！

慄 (動かず) 嗯^{ええ}。

瑞 (焦れて) 慄姨^{おばさま}ったら！

慄 (ゆっくり振り向き、傷心の裡にも柔和に名残りおしげに)

楽しいことって、ほんとに果敢^{はか}ないものね！ ただの楽しい夢でさえ、こんなにも短いのねえ！

瑞 (同情の口調で) もう遅いのよ。慄姨^{スウおばさま}！ 出掛けましょうよ！

慄 (沈みきって) 門にはまだ、錠がかけてあるのよ。鍵はあのう——

瑞 (自信あり気に) 平気よ！ 『北京人』がわたし達に力を貸して呉

れるんです。

慄 （よく呑みこめないで）『北京人』？

〔外で思懿スーイイが呼んでいる。〕

思懿スウさんの声 慄表妹！ 慄表妹！

瑞 （大客間への扉を推し開け、中を指さし）あの人なの！

〔扉の彼方むこうに、小山にも似た『北京人』が屹然と立つ。今や彼は、油にまみれた帆布地の工人服を着け、赤銅色の顔、鋼鉄の車軸にも似た腕、大きな手には、ペンチを握り、太く濃い眉の下、眼光炯々として恐ろしげではあるが、仔細みに観ればその底に、誠実でおだやかな微笑を含み、和気藹々たる親しみをも感じさせるのである。〕

思懿スウさんの声 （更に近ずき）慄表妹！ 慄表妹！

瑞 あのひと 彼女、来たわ！

〔瑞貞しきりど、大客間の隔扇むこうかの後 側にかくれる。『北京人』巍然として扉の前に立ちはだかる。〕

〔とたんに思懿書齋の小門から登場。〕

思 あら！ あなた一人ここでまだ此処ここにいたの？ お父さん 爹が、人参湯が飲みたいんだって。去いって頂戴！

慄 （うなずいて、すぐ行こうとする。）

思 （急に、いとも親し気に）あスウちゃん一慄表妹、そうそう、思い出したわ。わたしねえ、今話しちゃおうと思うのよ、ねえ?! （言いつつ テーブル 卓の傍にゆき、卓上たまに置いてあった珠を取りあげる。と、不意に『北京人』を見つけ、驚いて彼むかにむか対い）あら、お前、そこで何をしているの？

北京人 （じーッと彼女を見下す。）

思 （いぶかし気に）あんたきに訊きいてるのよッ！ あんたがそこで何しているのか——って！

北京人 （再びまた、軽蔑しているかのように口元に笑を浮べる）

慄 （落ち着いて）あのひと 彼、啞なんです。

思 （仕方なしに、いまひとましスウファン気に『北京人』を一ひとにらみし慄 方スウファンに向

い) わたし達、^{あちら}彼処で話しましょうよ!

〔思懿、慄方を引っ張り、書斎の小門から退出。〕

〔瑞貞、二人の去ったのを見すまし、直ぐまた、大客間への扉口から出て来る。〕

瑞 行った? (と、そちらを眺め、『北京人』の方へむき直り、外を指さし、語りつつ手まねをしてみせ) 門ね、——大門がね——錠がかかっているの——錠が、無いの!

北京人 (^{おもむ}徐ろに拳をあげ、一語一語荒っぽく力強く) 僕、たち——叩き——開け——よう!

瑞 (ちょっと驚いて) あんたは、あんたは——

北京人 (素直に親み易くほほ笑み) 僕に——^つ随いて——来——給え!

(直ぐ、しっかりした足取りで歩み出す)

瑞 (驚喜して) ^{スウおばさま}慄 嬢! ^{おばさま}慄 嬢! (不意にまた、振り返り『北京人』に親しみを籠めて) あんた、先に行行って——ね。わたし達、直ぐ後から行くわ!

北京人 (^{うなず}頷く)

〔『北京人』大いなる巨霊の導くにも似て、大客間への門を出て行く。〕

〔と同時に慄方が書斎の小門から登場。顔色、凄く蒼白。〕

瑞 (はずんだ調子で馳けより) ^{おばさま}慄 嬢! ^{スウおばさま}慄 嬢! あのね、わたしね—— (ふと慄方の蒼白な顔に気付き) どうなさったの? お顔が真青! どうだったの? ^{あのひと}彼女、あなたに何て言って?

慄 (微かに首を振る)

瑞 (はずんだ気分を抑え切れず) ^{おばさまア}慄 嬢! あのね、とっても不思議なことがあったのよ。啞が、ほんとに口を^き利いたのよ。

慄 (暗く重く) ^{そうね}哼! わたしも出て行かなくちゃあ——

〔突然、外部に一しきり非常に騒々しい銅鑼や、太鼓や^{シヤオナア}哨 吶の音が伝わって来て、風の音を圧する。〕

- 瑞 (驚いて振り返り) 何でしょう？
- 懐 多分、杜^{トウさんとこ}家でお棺迎えのお支度なのでしょ。
- 瑞 (再びほほ笑みながらたずねる。) あなた^{おばさま}のお荷物は？
- 懐 廂^{シヤンフアン}房に置いてあるわ。
- 瑞 持って行きましょうか？!
- 懐 (頷き) 嗯！
- 瑞 懐^{おばさま}嬢！ あなたは――
- 懐 (ひどくさびし気に) いえ。ちょっとあなた、先にいってね！
- 瑞 (いぶかって) どうして？ あなたはまた？!
- 懐 (頭^{かぶり}を振り) いいえ。直ぐ行くわ。わたし只もう一眼^{あの方}だけ、彼に
会って来たいの！
- 瑞 (果して――と、思わずむかっとなり) 誰によッ？
- 懐 (あわれ気に) お気の毒^{おじさま}な姨父に！
- 瑞 (はじめて解り) あら！ (同じように、すこし、切なくなつて) そ
うですね。じゃわたし、先に行くわ。あとで、停車場^{えき}であいましょ
うよ。
- 〔戸外で、文彩が「江泰！^{あなた} 江泰！^{あなたア}」と叫び、瑞貞はすぐ大客間
への門から出て行く。〕
- 〔懐方は書斎の小門へ向い、二足ほど歩きかける。と、文彩が書斎
の小門より登場。満面に涙の痕。〕
- 彩 (気が気で無く) 江泰^{あのひと}まだ帰って来てませんか？
- 懐 まだよ。
- 彩 あの人ったら、どうして未だ帰って来ないんでしょう？ (言いなが
ら、ソファーにくずおれて噎り泣きを始める) わたしの爹^{お父さまア} 呀！
お気の毒^{お父さまア}な爹 呀！
- 懐 (せき込んで) どうしたんですの？
- 彩 (ハンカチで涙を拭き拭き話す) 杜^{トウさんとこ}家の人達ったら、もう是^せが
非でも、お棺を担ぎ出そうとするの。お父さんてば、死に物狂いで止
めるの！ かわいそうに、かわいそうに 爹^{おとうさん} ったら、子供みたい

にあのお棺にしがみついて、死んでも放さないの。(又しゃくりあげて) わたしとてもあんなかわいそうな様子、見てられないの!

(頭をもたげ、二つの眼に哀憐おもいの情緒をいっぱい溢れさせている慄方スウさんを眺め) 慄表妹おとうさま、あなたおとうさまに、こちらへお入りになるよう勧めて頂戴な。もうお棺の側なんかで見てたりなさらないで!

慄 (いとも寂し気に、書斎の小門に向かう)

〔慄方書斎の小門より退る。〕

彩 (同時に独り言) おとうさま 爹! おとうさま 爹! わたしみたいな者にいったい、どうしろと仰言るんです?! (立ち上り、我知らず) お兄さま 哥々! お兄さま 哥々!

(文清の寝室に向かって歩き) わたし達みたいな者、何の役に立つの?! 何の役に立つんです?

〔突然、戸外に爆竹の音がけたたましく起る。〕

彩 〔思わず足を止め、振り返って眺める。〕

〔張順、書斎の小門より登場。彼の眼もまた真赤である。〕

彩 あれは、な一に?

張 (癩トウさんにさわるやら情無いやらで) 杜家とこで鞭ビエヌバオ 炮をならしてお棺迎えをしてるんですよ! うちの裏門まで開けっちまやがってッ! お棺ももう担ぎはじめてるんですよ。

〔爆竹の音の中に、多勢かつの担ぎ人夫かつの棺を担ぐよく揃った足音と、低い、アイホー アイホー(176)のかけ声が聞える中に、杜家の差配たちの、急がせ、指図する大声が錯綜し、同時に書斎の窓から数多くの提灯が、人の動きにつれて、慌ただしく揺れ動くのが見える。〕

〔此の時、陳奶媽チエヌナイマアと慄方スウさんが、曾皓スツツアを扶けつつ、書斎の小門から登場する。曾皓かおの顔面は紙のように蒼白、眼は血走っている。極度の緊張に気も狂わんばかり、どう言いきかせても入ろうとはしない。陳奶媽チエヌナイマア、涙を拭きながら、ひっきりなしに慰め励まし、引っ張ったり、推したりしている。慄方スウさんは、傷まし気に、曾皓の顔を見守る。彼等の後に思懿スーイイがつづく。彼女も亦、ハンカチを持って眼のふ

(176) 日本のヨイショ、ヨイショなどに当るかけ声。

ちを拭ってはいるが、砂でもとっているのか、それとも涙を拭いて
いるのかは知れたものでない。]

陳 (たてつづけに) お入りなさいませよ。老爺子！^{ご隠居さま} ——御覧になぞ
ならないで、お入りなさいませ——ってば——

皓 (振り返りどもりながら喚きたてる) お待ちッ！ ま、待ってという
に！^{あいつ} 彼奴らを、ま—待たせるんだッ！ (わなわなと顫えつつ、
^{スーイイ} 思懿に向かって言う。言語がしどろもどろになる) お前、もう一度
^{あれ} 彼奴たちに言っとくれッ！^{かね} 金子が——すぐ来る。人が直ぐ来る。
^{かね} 金子が人を持って来るんだァ！^{あいつ} 待たァ待たせろッ！ 彼奴たちを、
もう少し待たせるんだァ！

慥 ^{イイフウ} 姨父！ あなたは——

〔慥方は曾皓を扶けて、その辺に倚りかからせると、老人のこんな
にも興奮し喘いでいるのを見、ふと彼に何かを持って来てやろうと
思いついたらしく、急ぎ書斎の小門から退場。〕

陳 (絶えずさとし続ける) 老爺子、あんな者達、行かせちゃいなさい
ませよ。(にくにくし気に) 持ってゆかせて、こちこちの死骸を放
りこませるんですよッ！

皓 (まるで、すがりつくように) お前行って来てお呉れよッ！^{スーイイ} 思懿！

思 (この時ばかりは彼女もちょっといたたまれず、しょうことなく、
子供でも^{だま}騙すときの^{くちぶり}口吻で) ^{おとうさま} 爹！ お金が出来たらね、また、
わたし達が好いのを買いますからね！

皓 (激怒し) ^{ウエヌツアイ} 文彩！ お前行って来い！ 行って来いッ！ (足を
バタバタさせて) 江泰は結局帰って来るのか来ないのか！^{あいつ} 彼奴、
来るのか来ないのかッ？

彩 (ずっと傷心に沈みきっていたが——たて続けに答え)^{あのひと} 彼、来ま
す。来ますのよ。^{おとうさま} 爹！

〔戸外に、爆竹の響、一段と高まり、棺を担ぐ足音、ヒタヒタヒタ
と、歩くが程に近づき来り、すぐ眼の前へとさしかかったもようで

ある。]

皓 (我知らずわめきだし) 江 泰! 江 泰!

(文彩に言うようでもあり、また自身に対して言うようにも——)

彼奴何処へ行ったのだ? どこまで行ったんだ!

[この時、大客間への扉が、突如として押し開かれ、江泰が真赤な顔、頭髪は乱れ、全身皺くちやの衣服で、フラフラッと歩み入って来る。]

[爆竹の音、次第にやむ。]

皓 (自身の眼を疑うように) 江 泰! 帰って来たのか!

江 (小丑そのまま、笑うでも無く、泣くでもなく、得意なのか、それとも悄気ているのか見当もつかぬ表情で、すっとぼけて彼に頷き) 僕かァ——帰って——来ましたよッ!

皓 (今頃顔を見せた所以にも思い及べないで) 好かったなァ。好いところへ帰って来ておくれだ! 張 順! 彼奴たちを待たせておけ! 金をやって、追っ払っちまえ! 張順!

[張順、すぐに書斎の小門から退場。]

彩 (と同時に、江泰の前に近づき) 借り——借りたお金は! (手を出す)

江 (はしゃぎきって、手を一つ叩き) 此処にあるよッ! (ポケットから、くしゃくしゃにまきこんだ塵紙を一束取り出し、ポンと彼女の手たたきつけ) ここにあるぞッ!

彩 あなたッ、あなたったらまたァ——

江 (同時に戸口の方を振り返り) 入って来いよォ! 転がりこんで来

(177) 旧時代の中国の旧劇すなわち京劇は、舞台装置や小道具などから言えば、簡素・象徴的という点で、日本の「能」と一脈相通じるものがあったが、筋の運びが、主として「うた」で行われるなどの点では、西欧のオペラに似る。といわれたその西欧の演劇のピエロ的存在に似たものが「小丑」と呼ぶ道化役である。

但し、解放後、特に文革後の京劇の舞台装置・小道具などはおどろくほど現実的に変わって来ている。

やがれッ！

〔なんと、大客間への扉から警官が一人入り来り、その後に曾霽がひどく面目無げな表情で、手には半ば飲み残ったブランデーの瓶を持って続く。〕

江 (手も足もふらふらながら、当るべからざる気焔で) この男だよ！
(再び指さして、断乎たる口調で) この男——なんだ！(曾家の人達の方へむき直り、釈明し) 僕ッね、北京飯店で部屋を一つとって、一晚泊ったのさ。ところがだ、今日になって、こいつ等と来たら、僕が品物をとった、こいつ等の品物をとったなんて言やがるんだ——

皓 こりゃあ——

警官 (非常に、もの馴れた態度で) 失礼いたしました。昨晚、わたくしどもの派出所で、こちらの先生に御迷惑をおかけいたしました——

江 糞ッたれ！ 北京飯店だぞ！

警 (依然、非常に丁重に) 派出所でした！

江 (威丈高に) 北京飯店だぞッ！(警官を指し) お前んとこの局長を、俺は知ってんだぞ！(言いながら歩いてしたが、一瞬、怒気は九天の外へ霧消し) 君ィ見給え、これが僕の邸^{うち}だ！これが僕の家内！
(奇妙なことに、ふと、たった今の衝突を忘れ、得意そうに) 僕の岳父^{ツオンハオ}、曾 皓先生だよ！(不意に顔を上げて笑い出し) 見給え！
(部屋を指し) 僕の部屋^きなんだ！(警官を眺めて笑いながら、まるで参観人の案内でもしているように、とりとめなく指さしたり、手をつけたり) 僕のテーブル！(自身の寢室の入口へゆき) 僕たちの戸^ド口だよ！僕の——(そして、口の中ではまだぶつぶつ呟やきながら、うやむやに中へ入って行ってしまふ)

〔不意にドタッとあまり大きくない音が一つ——。〕

彩^{タイ} 泰！あなたは——(自分たちの部屋へ馳け込む)

警 御一同、只今すべて御覧の通りですが、こちらの坊ぢゃまにも、本官から御連絡の上、御了解願っておきました。(気軽に拳手の礼を

する)

〔警官、大客間への扉から退場。〕

戸外の人声 (面白そうに) さかつァ担いだり、担いだりッ! (続いてどっとばかり笑うと、直ぐまた重い足音が起る)

皓 (急にまた振り返る)

陳 旦那さまあなた、どうなさるんです?

皓 見るんだ! 俺わしは見るんだ――

陳 もういいじゃありませんか! 御隠居さま老爺子――〔曾皓、前に歩き、陳奶媽たすは扶けようと急いで近寄る。思懿も行って扶ける。陳奶媽と曾皓は書齋の小門から退場。〕

〔外部の喧噪と足音は、かど角を曲るにつれ次第(178)に遠ざかる。〕

思 (曾皓を出口まで扶け送ったが、すぐ戻って来て好奇心いっぱい)

ティンアル霆 儿、あの巡查、何て言ってたえ?

霆 タイおじさま姑ゆうべ爹がね、昨夜、ぐでんぐでんに酔っ払って舶来品店へ買物に行って、ついでにその店のお酒を一瓶もって出ちゃったんだって。

思 其の場ですぐ捉ったの?

霆 ええ 噫! どうしてか解らないけど、おじさま姑爹は一晩派出所にいるうちに、その「ブランデー白蘭地」を半分も、飲んでるんですし、そして、どんな風に言って自分から出て来られたのかも解らないんだけど。(半分残っている酒瓶を持ちあげ) ブランデーこれがその飲み残りの「白蘭地」! (瓶を卓上に置き、情なげにソファーに腰を下す)

思 (よい気味とばかり) そりゃまた好かったわねおじさま。お前の爺爹と来たら、また新手をひと一くさり覚えこんだってわけだね。(寢室に向って歩み) ウエヌテン文清! (入口までゆき) あなたア文清! さっき、わたしもうスワ懐表妹に話したわよさんッ! あのひと彼女、とっても喜んでるみたいだったわよ。これからは好いわね。あなたも御機嫌だし、わたしも気が楽だわ。

(178) 曾邸は本来非常に広大で、房子(建物)は幾棟もあり、建物の外側を歩いて表門へ出ようとするれば、自然、それぞれの建物に沿う曲り角を幾つも通ったり、長く真直ぐな建物と建物の間の邸内の道を歩くことになったりする。

あなたにとっちゃ、好きな^{スウさん}慥表妹が付き添ってくれることになるんだし、わたしの方は、坐^産褥^褥(179)の間じゅう、面倒をみて貰えるんだわ!

霆 (母親の最後の一言^{ひとこと}が針のように耳につきささったらしく、感電でもしたように猛然と顔をあげ) ^{お母さま} 媽! 何ですって?!

思 (よく呑み込めず) 何がさ?

霆 (ゆっくりと立ち上り) ^{お母さん} 媽! あの、^{おかあさん} 媽も——もう直き、——あもう——

思 (幾分きまり悪げに) ^{ええ} 噫? ——

霆 (おずおずと) 生れるの?

思 (顔に事実であることが現れる。が、) どうして?

霆 (自身の母を絶望的に一瞥。——間。にくにくしげに重く) あーあ! お生みなさいよ!!

〔突然、霆児は大客間への^{とぐち}隔扇門から馳け去る。〕

思 ^{ティンアル} 霆児! (二三歩追いかけ) ^{ティンアル} 霆児! (辛そうに) ^{つら} わたしの霆児! ^{ティーンちゃん}

〔文彩が寢室から慌てて出て来る。〕

彩 ^{おとうさま} 爹は?

思 (ぼんやり立ったまま) お棺を見送ってる!

〔文彩が書齋の小門の方へ行こうとした時、陳奶媽が曾皓を扶けて書齋の小門から登場。皓は戸口のところで入ろうとせず、外を眺めて大声で叫ぶ。文彩はすぐ戸口の前へ行く。戸外の提灯は少くなり、あの多数のお棺担ぎの人夫たちは、もう遙かに遠く歩み去っている。〕

皓 (顔を門外に向け、遠くへ向かって叫ぶ) いかん、そりゃいかん! そんな^{かつ}担ぎ方ではいか——ん!

陳 もういいじゃありませんか! ^{ご隠居さま} 老爺子!! ^ほ 放っておおきなさいましよ!!

(179) 子供が生れて満一カ月目を「満月」といって盛大に祝う。それまでの期間の称。

- 彩 (たてつづけに) ^{おとうさま} 爹! ^{おとうさま} 爹!!
- 皓 (未練そうに担がれてゆくお棺を眺めながら、叫び指さして) いか
——ん! ぶっつけたらだめだァ!(陳奶媽に向かい) ^{アイツ} 彼奴らに、あ
の土塀にぶっつけないように言って来ておくれ! あの棺の蓋は四
^{へい} ^{(180)うるし} 川漆が塗ってあるのだ! ぶっつけちゃだめだよ! ぶっつけるこ
とは出来ないんだ!
- 思 放っときなさいませよ。 ^{おとうさま} 爹! ぶっつけて壊れたって、他人の ^{ひと} も
のですよ!
- 皓 (^{スーイイ} 彼女の言葉に、我に返り、同時に鎮静し、放心に陥いる。——間。
突然、^{ワンチイヤ} 慟哭。) ^{わしのばあさんやあ(181)} 亡妻呀! 我的亡妻 呀! お前は上手に死んだな
あ! 早く死んで好かったよッ! 死なずにいた ^{わし} 者はなァ——、自
分の——お棺でさえなァ——そっくり——(足をバタバタさせ) 生
きていたとて——、子供達は何一つしてくれやせんよーう! こん
な鼠みたいな子や孫に何が出来るんだァー!(悲しげにソファーに
くずおれる。)
- 〔ドドン! と土塀の倒れる音。〕
- 〔一同、沈黙。〕
- 彩 (低声に) ^{へい} 土塀がたおれたわ。
〔静まり返る中へ、江泰、自身の寢室から、よろよろと再びよろめ
き出る。〕
- 江 (何とも満悦げな笑顔。絶大な善意でもって、思懿に ^{わか} 対い) 僕、君
に言っておいたでしょう! 仲秋節に、ほら、僕が話したでしょう。
たおれる。たおれる、——ってね。そうらねェ君ィ! 御覧なさい
よ! でしょう——

(180) 四川省は産出量が多いばかりでなく、質がよいとされる。その代りもろいといわれる。

(181) 日本では自分の妻の呼称として夫が妻にむかって「奥さん!」と呼びかけることは殆どない。中国では「太々」をそのまま、呼びかけることばとしても使ったが、「亡妻」をただの名詞でなく呼びかけ語ともするこれはよい実例である。

〔思懿、いまいましげに彼に一瞥をくれ、ついでと身を翻^{ひるがえ}して、書齋の小門から退場。〕

江 (かぶりを振って) あーあ、誰も僕の話^{はな}をきいてくれないんだ！
誰も僕をかまってくれないんだよッ！ 誰一人僕を相手にしないんだァ！

〔江泰、^{いやべ}銜舌りながら、手ついでに、また、卓上の半分残りの「白蘭^{ブラン}地^{ヂー}」を取り上げ、再び自室に入ってしまう。〕

彩 (気が気でなく) 江^{ヂヤンタイ} 泰！ (つづいて入る)

〔遙かに遠く、再び鶏がときを告げる。〕

陳 あーあ！

〔この時、隣家らしき辺りから、不意に女の^な哭声が伝って来る。慥方、片腕に自分が持って出て行こうとしている毛布をかけ、片手に人參湯の湯呑を持ち、書齋の小門から⁽¹⁸²⁾登場。〕

皓 (顔をあげ) 誰が^な哭いているのだ？

陳 多分、柱^{トツさん}と^こ家の御隠居が息を引き取ったんでしょうよ。わたし、見て参ります。(曾皓、また^{うなだ}項垂れる)

〔陳奶媽、急ぎ書齋の小門から退場。〕

(182) 高価な朝鮮人參の煎じ薬。曾皓は滋養強壯と自身の長命をはかる唯一の頼みの綱^{つな}として愛用してやまなかった。

慥方は先刻、「何かを思いついたように出てゆく」と記述されていたが、この場の動作の為の伏線である。その優しい誠実な性格から、この切羽つまって大変な決意で永久に出てゆかねばならぬ最後の時に、自らの手で、今一度伯父の何より好む人參を煎じて飲ませようと、心せく脱出行を直前にしながら、長い時間をかけて(約五合の水で、素焼きの陶器を用いて強火をさげ、半量にまで煮詰める)つくって来た。

この戯曲の創作当時は、やがて知識人間に西洋医学が信奉される空気が澎湃として起ろうとする時期で、そうなれば古来の漢方薬は当然軽視される。その傾向が既にあらわれているのが最初の曾皓の人物説明に、民間通俗処方^{ぶん}を信奉するという文句である。

現在の中国では西欧医学の長所と漢方的治療法の研究の併用であり、この点でも「二本足で歩く」という方向をとりつつある。

〔鶏が鳴く。〕

愫 (曾皓に近寄り、静かに) 姨父!^{おじさま}

皓 (頭をもたげ) あ?

愫 (やさしく) お言いつけの、人参湯ですの! (差し出す)

皓 儂が、ほしいと言ったかな?

愫 へい (皓の掌の中に^お攔く)

〔円児が、不意に大客間への扉^{とびら}から、こっそり登場。依然として、例の服を着、只その上に、もう一枚スカートと同色の短い半コートを重ね、首にゆるく黒地に白い水玉の^{サテン}縞子のマフラーを巻き、「北京人」の剪^{シルエット}紙を手を持つ。〕

円 (入口に立ち、低声に促し) もう直ぐ夜が明けるわ。早く出かけましょうよ!

愫 (頷く)^{うなず}

〔円児、その剪^{シルエット}紙を持ち、愉快そうにニコリと笑うと、首をすくめながら退場。扉、しまる。〕

皓 (一口飲むと、その人参湯をソファの側の卓上に置き、長い力ない嘆息を一つ吐き) あーッ! (項垂れ眼を閉じる)

愫 (心に掛かる様^{さま}で) 少しはよくなりました?!

皓 (うやむやに) うん、うん――

愫 (あわれ深く) わたし行きますのよ、姨父!^{お義父さま}

皓 (頷^{うなず}き) お前^い去って、少しお休みよ。

愫 はい。(ゆっくりと) わたし行きますわ!

皓 (極度の疲労に睡くなった様子で、微かに) 嗯!^{うん}

〔愫方、むき直り、二三步あるく。がまた、弱り果てた老人の哀れな姿を見ると、堪えきれず、またも引き返し、自身が持って出ようとしていた毛布を、軽く曾皓に被^かけてやる。〕

皓 (不意に、ぼんやりと、) あとでまた来ておくれ!!

愫 (眼に涙をいっぱいため) すぐまいりますわ!

〔愫方、後じさりしつつ曾皓を見守る。〕

皓 (眼を閉じたまま) また来て叩いておくれなあ。

懐 (涙, とめどもなく溢れる) ええ, また来て叩いて差し上げます!
また来て—— (誰かが再び入って来そうな気配を聴きとめたらしく
すぐ, 大客間への門に向かって去る。)

[懐方が, たった今出て行ったところへ, 文彩が寢室から出て来る。]

彩 (皓が居眠っているのを見て軽く) ^{おとうさま} 爹! 人参湯をお飲みなさいまし! さめますわ!

皓 いや, ^{わし} 儂は飲みたくない。

彩 (悲しげに慰めて) ^{おとうさま} 爹! 悲観なさらないで下さいね。どんな辛い日だって暮して行かなくちゃなりませんもの。(涙を流し) お待ちになってね。^{おとうさま} 爹! 来年の春までお待ちになってね。そうすれば ^{おとうさま} 爹のお体もよくなるし, ^{ひいまご} 曾孫だってお抱きになれるし, ^{あひと} 江泰の痼癖もなおるでしょうし, ^{お兄さま} 哥哥だって帰って来て, よいお仕事を見付けるでしょう——

[突然, 文清の寢室内で, 誰かが「ウーン」とうめいて, 寝台から落ちたらしい音。]

彩 (思わず声をたて) あッ! (曾皓に) ^{おとうさま} 爹! わたし, 見て参りますわ。

[文彩, 直ちに文清の寢室に馳け入る。]

[陳奶媽, 書齋の小門より登場。]

皓 (弱々しく) ^{トツさん} 杜家では——死んだのかい?

陳 死んじゃいましたよ。もうお仕舞ですわ。

皓 眼がひどく痛い! ^{あかり} 灯蕊を小さくひねっておくれ!

[陳奶媽, ^{ランプ} 洋灯の蕊を小さく捻る。室内, 暗くなり, 大客間への隔ての隔 ^{ゴーンヤヌ} 扇の上に, 第二幕と同様, 次第に例の類人猿を模した『北京人』の巨影があらわれる。]

陳 (頭をあげて ^み 看, ^{ごと} 独り語) あのいたずら娘の ^{ユアヌシイヤオデイエ} 袁小姐! いざ出発して時にまで, まだこんな——

〔文^{ウエヌツアイ}彩，慌てきって飛び出して来る。〕

彩 (小声に，せき込んで) 陳^{チエヌナイマア}奶^{チエヌナイマア}媽！ 陳^{チエヌナイマア}奶^{チエヌナイマア}媽!!

陳 えェ?!

彩 (極度の恐怖に咽喉もかすれてしまい) お，お前，大きな声を出しちゃいけないよ。それから，早く大^タ奶^{ナイ}奶^{ナイ}に言っといで！ 哥^ゴ哥^ゴが，阿^ア片^ハを呑んでもう脈^マまで，停^トってしまっている——ってね!!

陳 (仰天して) ええッ!?(^な哭きかける)

彩 (急いで彼女を止め) 泣いちゃ駄^タ目！ 奶^{ナイ}媽！ 老^{ラウ}太^{タイ}爺^ヤはね，もう此の上のことには堪えられないんだよ。早くお行き!!

〔陳^{チエヌナイマア}奶^{チエヌナイマア}媽，書齋の小門より馳け去る。〕

彩 (強いて落着き，曾^{オトウ}皓^{サマ}に近づき) 爹^{オトウ}！ もうすぐ夜が明けますわ。わたしがお伴しますから，もう行ってお休み遊ばせ。

皓 (立ち上り，二足三足歩き) さっきの，あの部屋の中の音は，何だったかな？

彩 (悲痛に) 鼠^{ネズミ}ですの。鼠^{ネズミ}があばれたんですわ。

皓 ああ！（訳者注，力のない発声，しかもよくとおる声で）

〔文^{ウエヌツアイ}彩，曾^{オトウ}皓^{サマ}を扶けて，書齋の小門を抜け，ゆっくりと出てゆく。外界に又もや鶏^{トリ}がときを告げ，大空は白みはじめる。通りを隔てた小路を，⁽¹⁸³⁾騾^ロ馬^バの曳^{ヒキ}く車^{クルマ}が，ゆっくり通り過ぎて行く。遙かに遠く，二声，鋭い列車の汽笛^{キスイ}が伝わり聞えて来る。〕

(幕，静かに静かに^お下^{くだ}りる)

(183) 馬と驢馬の混血種。馬の力と，驢馬のおとなしい性格の，両方の長所を備える為^{ため}に重宝がられ愛育^{あいいく}されていた。

後記に代えて

1. 主題などに関するメモ

この戯曲『北京人』は、偶々1920年代、北京の南西48Kの周口店から発掘されていた原始人類の骨のひとつ、「シナントロップス・ペキネンシス」にからませていることは前述の通り。

一方、生きている『北京人』としては、たくましくも頼もしい考古・人類学者 ^{エアズ} 袁 ^{レスガニ} 任 ^{ユアヌユアヌ} 敢。その娘、袁 ^{ユアヌユアヌ} 円は奇しくも現代に原始人のナイーブさを持って育ちつつある。健康そのもの。名については後述するが、この父娘の姓の袁は、原始・元始、人類の源、はるかに遠い ^{ユアヌ} の yuan の音に通じて、考古学と父娘の志向するところとを暗示している。

北京の曾 ^{ツオンハオ} 曾 ^{ツオンハオ} 皓は、現代では（以上、現代とはその創作された1930年代～解放までを指す）滅亡あるのみ。終戦まで、まだこの種の人物は北京には少なかった。その長男文 ^{ウエヌチン} 清は当時のいわゆる北京人——の好もしさの一面と、徹底的な不甲斐なさの一面を摘出している。口を開けば口外に文化人であること、進歩的であること、上流階級に所属し有名人や権力とつながりのあることをひらけらかす鼻 ^{ヂヤンタイ} もちならない江 ^{テイ} 泰は、爛熟老化した都市文明の産物である泡末的北京人の一典型。甕 ^{テイ} も亦、おとなしく人が好いばかり、憶病で何もなし得ないと自嘲もしていた当時の北京人の一群を、りきみもなしに巧みに表現している。解放前、各階層の至る所で幅をきかせ、のさばっていたのが思 ^{スイイ} 懿 ^{スイイ} 的女性。心から嫌悪しながら、周囲の者は如何ともし得なかったその頃の有様が、この作者としては、何とも執拗に、うまく語られている。

当時の殆どどの男性が、作者と同じ思いを胸の底には秘めたであろうしとやかで優しく、よい意味での封建性を備えながら、その底に驚ろくべき強靱さと自主性を秘め、忍耐の極限まで堪える。が、立つべき時期には決然、明日への冒険に旅立つ。別れに臨んで自身を育てた者へ、手に在る最後の毛布を与えてしまう。当時の北京人の最高峰の女性として、作者の渴仰的だったらしい ^{スウフアン} 方 ^{スウフアン} 方。北京の若さと未来の担当者 ^{ルイヂエス} 瑞 ^{ルイヂエス} 貞も忘れず点描してある。

何気ない筆勢の下に永い歴史の積み重ねを経て成立した北京人の特色（それらは全部当時の華北人の口に喰灸していたものであった）を、鮮やかに浮き彫りにしつつ、劇としては時と事件と人物のからみ合いを、極めて自然に運命的に、音もなく推移する感じで読者に浸透させながら、実は研ぎ澄された構成員によって、一分の隙もなく終局の緊張へと盛り上げてゆく。

以上は『北京人』を含む彼の戦前の四つの戯曲に共通するうまさであり、当時の華

北の若者たちから、作者の眼にとまった中国の四つの方面（『日出』——経済都市，『原野』——農村，『雷雨』——欲望因果）の変革さるべき弱点や悪を抉って見せ、それとは言わず明日を待望したものと受けとられていた。

その四戯曲中本篇は、長い封建制の残滓と重圧から脱却しようとして、反って文明と欧化の波に毒され、虚飾・頹廢・無気力そして、インテリ意識とか自由の名の下に徹底的な利己で労働を嫌うなど、砂のようだと嘆かれた当時の中国人、その代表としての北京人を、自ら摘発したものとして、抗戦期間中、淪陷区といわれた日本占領下の青年たちは、秘かに自戒と発奮を促す書ともしていた。

2. 作者に関するメモ

(a)

その略歴。生年に関しては、現代中国作家簡影：香港友聯：1971年 によれば1905年。河出書房：現代中国文学全集：第13巻：曹禺篇 では1910年とする。また1909年と最近耳にしたが、これが正確ではないか、将来たしかめる外はない。湖北省潜江に生れた。本名は万家宝、字を小石という。

父が陸軍少将であり、幼時は小学校へ通わず、専ら家塾で学び、芝居ずきの母親の相伴で、舞台にかけられる芝居という芝居を見たといわれる。天津の南開中学から北京の清華大学。1934年に卒業後も大学研究院で演劇研究を続けた。その間、渡英しての研究を望んだが果さず、戯劇とその理論の執筆。『雷雨』を34年12月雑誌『文学季刊』に発表した。のち、天津女子師範学院（河出の全集では大学）。また、南京国立芸専の教授ともなる。1937年清華大学へ戻り、やがて抗戦のため四川へ。そして、重慶の国立戯芸学院。『北京人』及び『蛻変』はその43年、いわゆる重慶時代の作である。1944年には中央映画にも関係した。46年には老舎と共に米國務省に招かれ、ワシントン大学その他で中国演劇の講義の為に出席、中央文芸が送行パーティを催すなど脚光を浴びた。国共闘争の尖鋭化時代には一時香港に逃れ、シナリオ『艷陽天』をものした。また、帰国後は上海市立実験戯劇学校教授をしている。1949年には北京新政治協商会議に文化界代表として出席。55年、文化部直属の中央戯劇学校副校長。我が国へは二度来ているが、1965年には、第二回原水爆禁止大会に中国代表として出席した。（拙著：中国における女性会話の特徴的性格——曹禺の『雷雨』『日出』『北京人』について——中京大学論叢：1964年教養篇第5号を参照）

著書には、前記『雷雨』四幕。『日出』『北京人』『原野』三幕、また『蛻変』四幕。戦後には『橋』四幕。オニール作『氷人来る』の翻訳、前記シナリオ『艷陽天』、そして『明朗的天』四幕など。

(b)

その特徴。彼に関して、日本の関係者が普通に挙げることの他に、幼時の家塾にお

ける古典学習の結果と思うが、作者の語彙への造詣の素晴らしいことをあげたい。繊細な珠玉のように味わい深い語を惜し気もなくふんだんに用いる。普通なら難解でごつごつした感じになる語彙群も、おとなしやかに素直に、淀みなく流れ匂うような文章に書き馴らされてしまう。

語彙に対する素養と彼らしい配慮の行き届き方は、登場人物の姓名にもうかがうことが出来る。

曾家は過去の存在を示す^{ツナン}曾をもって来たが、実在の姓であることは前記の通り。作中、嫌悪して止まぬ女性^{スーイイ}思懿は、懿を分解すると忝と恣であり、恣はほしいままである。^{スー}思=思 ^{イイ}忝=一番とか最も ^{イイ}恣=ほしいまま と並べてみるだけで、人柄が彷彿とする。

^{スウフアン}欸方—この名はこの人物をよく表現していない云々と作中に述べてあるが、それでも、素は素朴・原素・生地のままなどの意を持ち、人の性を善とみて、原始北京人本然の心を具備した（^{ヘン}へんは本来心を示す偏であるから）人物という命名であろう。

脇役、袁任敢も^{ユアマ}袁は注や前述のように元来とか源泉とかに通じ、その上、敢えてその衝に任ずる——勇敢に信念に邁進する人物、と表明させてありながら、実は極く平凡な実在の姓名であることほほ笑ましい。

その他、登場人物各人が実に巧みにその人柄を表わす姓名を与えられている。

中国ばかりでなく日本でも 幸恵・千代 など、親の祈りがこめられる命名であるが、文学者が象形文字の成立にまで立入る例は少ないのではないか。

3. 翻訳に関するメモ

(a)

翻訳論は攔き、翻訳のゆき方の普通なひとつは、どちらかといえば、読者を意識して、読み易いことに重点をおくもの。別のひとつは原作者の方を強く意識して、原作の意図するところを、可能なかぎり正確詳細に把握し、作者の語彙に対する研鑽の努力までを受けとめて、用語のニュアンスは勿論、原文の語彙の集落から立ちのぼる仄かな民族の匂い乃至は作者個人の文章の雰囲気までを、異民族の読者が感得しうるまで努力しようとするゆき方である。

作者と訳者が別個の個体である上、歴史も生活体験も、各自を育てた気候まで、総てが全く異なる異民族である以上、それは至難というより殆ど不可能なことにはちがいないが、その線に沿おうと努力するゆき方である。

実は本篇は昭和17年頃（三十数年前）一度^{よみもの}よみものとして全訳した。動機は当時、いわゆる中国ものなら出せば売れるというので、読者が買ってから腹を立てるような無責任な出版も次ぎ次ぎと出ていた。そのことを留日中国人学生に指摘され、力も無いのに義憤のようなものを感じて取りくんだのは若気の至りであった。家事の間に全

一年かかって仕上げた時は、紙の統制で出版不能であった。今回は売るためのゆき方を採らず自身の語学の研鑽として試みた。

元来この戯曲は、前記したように、作者もその対象の読者も共に、基礎教育に中国古典——漢文をみっちり叩きこんだ上に、新式口語文の教育を受け、その上に高等教育として西欧文学の素養で仕上げをするという時代の産物である。故に本篇も会話以外の部分は、

幾分古い語彙を、新しい時流に活かした用い方^{つか}をして新鮮味と親しみ易さをもたせ、やがて劇画文など、極く平易な、全くの日常語文に移るはし渡し的存在でもあり、そこへ作者の漢文素養の深さと或るセンスが加わって、音読してみると流れるように心地よい——この戯曲では寂聊感の滲む——リズムのある原文となっている。

日本の国語は、文体・語彙などの上で、余り大きな時を隔てず、中国と実によく似た変遷の経験を持っている。そこで、訳文にも原作と全くおなじような試みが出来るのではないかと、その線に沿って、時間が極端に限られるという条件は気にしながら、敢えて語学力鍛錬のためにと無謀な困難な努力に踏みきった。

(b)

この戯曲の特色のひとつは、当時の北京の風物・風俗・生活習慣の中でも、特に中国一漢一人の思考の底に在る心の在り方・情緒など——中国事情としてはその方面の関係者である人々から従来あまり重視されなかった。従って日本人一般には殆ど全く知られていない——がよく紹介されていることである。

翻訳の劇の筋を追ってゆくうちに、自然にそれらをも理解出来るようにということも狙った。但し今、非常な心残りをもって稿を終る。一例をいえば、食品に関しては30年前、原作にある食料品店など実際に調査し歩いたが、当時食糧事情など戦争のため閉店した店は現存するか否かなど、数カ月以前の問い合わせの結論もまだ出ていないなどからである。また、

作中の北京風物の内、特に作者が重視して描写したのは、北京の巷の物音である。^{おはやし}音楽を伴わない劇構成の、重要部分をつとめさせている——とさえ言えよう。実は戦前、土地っ子北京人でない中国人までが、北京の歴史と気候など諸条件とピタリとマッチした巷のもの音は北京の牧歌——北京が北京である所以とまで呟いて、こよなく愛^{いと}しんでいたものである。1976年現在、天然現象を除くそれらの物音——銅鑼の音・角笛・車の軋む音・さまざまな物売りの呼び声とその特徴的のもの音の一切——は、総べて巷から消滅して、その意味では全く静かな北京に変貌している。新しい、そして人心を安んじるもの音が北京の巷の音として定着した時、中国が落ついた感じをすべての人に持たせるのであろう。

(c)

人物の呼称、相互の呼びかけ語は日本と大分違うので、ひき比べて読みすすめるよう、出来るだけ中国語その儘の漢字を使い、発音の大体を片仮名ルビで表し(前述)、その発音の語尾子音の \dot{n} と \dot{ng} はヌとンで区別しておいた。

(d)

またそれらの語や名詞などに、平仮名ルビを幾通りにもつけたのは、それ等を、日本では或る場合にはどのように呼び、また別の場合などには、この様にも呼ぶということまで、出来るだけ多く示したかった(前述)などということもあるからである。但しまた、日本語の前述の試みの味を出すためのふりがなも、平仮名でつけた。

(e)

日本で、例えば老祖母などが可愛くてたまらない孫に頬ずりしながら、「おたから！おたから！」など口走る。中国では愛情を示したいとき、日常、我＝わたし 的＝の という二語すなわち、「わたしの」と殆どが付加するが、陳奶媽は、その「おたから！」というような感じを「わたしの肉！」と言っている。わたし——自身——の肉ならば自分に最も親しいというより、自分そのものであり、それが究極の親しさを表わす愛情の語ということは理窟ではわかるが、従来の一般的日本人の感覚では、どうも何となく少しどぎつすぎる表現なので、従来^の翻訳では日本的表現になおされているものが多いようであった。このようなことばは、特に中国語をそのまま出して(文字の羅列だけで、何となく意味の理解されそうなものに限定したが)平仮名ルビで、そういう場合に使われるであろう日本の一般的表現をつけておいた。また、

「呼びかけ」や単なる名詞ではないが、日本なら例えば「お前のお腹の中の^{なか}子供は」などと、憎みあっている間柄でも言うであろうところを、「腹の中の肉」または「肉塊」などと、日常生活でもよく耳にしたので、これらについても従来あまり注目されていない(注158参照)ので、一応紹介する意味でとりあげておいた。

(f)

原作は解放後、相当部分を改訂された『北京人』が中国で人民文学社から出版されており、今ごろ曹禺のしかも昔のものを、といわれることも考えないではなかった。が、三十数年前の労作の仕上げを、今ここでして置くようと、切にお勧め頂いた方々の御厚意に何としてでもお応えしたかったことが、ひとつと其上、前にもちょっと触れたが、中国がなぜ現在ほどにまで変り得たかという、その原動力・エネルギーとなったものは何か、という疑問を解く鍵のひとつとして、中国人一般の日常的な、思考とさえ言えないほどの心の在り方・情緒などというものについても、矢張りもっと注目し、特に歴史的に考察する必要があると確信するので、今回は敢えてこの中華民国三十年(1941年)十二月：上海文化生活出版社の初版本を使用した。 以上

1976. 1.13 朝

通巻訂正 1. 第16巻第1号 238頁 {第6行目 第1景 は 第一場
|第7行目 第2景 は 第二場

2. 同じく第3号 212(860)頁 第3行 第二幕 は 第二幕 と訂正。
猶、第1号は原稿×切直前1週間に着手し印刷関係などを打ち合わせる時間がなく、
第2号以降はまた経費その他を考え、兒を儿としたほかは、旧漢字を使用した。